

2024 年度

The

2024

Journal

大学造形美術教育研究

第23号

【会長挨拶】

大成哲雄（聖徳大学）「大学造形美術教育研究」第23号の刊行に寄せて……P.3

【指名レポート】 全美協造形教育フォーラム 2020 報告

香月欣浩（四條畷学園短期大学）篠永洋（東北文科大学）／仁木裕美（大阪人間科学大学）／佐藤牧子（国際学院埼玉短期大学）／重田祐貴（若井産業株式会社）「トントンゴゴゴ」が、やりたい気持ちを ON にする ～釘の魅力～
……P.4

【研究ノート・実践報告】

石原綱成（高崎健康福祉大学子ども教育学科）保育現場における「壁面構成」の意義……P.16

宇津木七実（関西女子短期大学）幼児の「刺す」からはじまるカラー釘の活動……P.20

仁木裕美（大阪人間科学大学）シルクスクリーン印刷によるサコッシュ作り体験教室の記録……P.24

林韓燮（名古屋柳城女子大学）地域と連携した子どもの絵具あそびの実践……P.28

福岡龍太（新潟青陵大学短期大学部）あえて盛大にワークショップを行わない立案ーふうカメは木を観て森も観るー……P.32

森高光広（東京未来大学）「造形制作実施時の留意点の再確認」～教育現場での造形教室実践を踏まえて……P.36

山本将之（大阪大谷大学）シャボン液と口の接触を避ける手作り拭き具を用いたバブルアートの実践……P.42

渡辺 一洋（育英大学）『イソップ物語を題材とした作品製作と表現』……P.46

【産学連携レポート】

佐藤牧子（国際学院埼玉短期大学） 引地貴子、福島夕貴（桂屋ファイングッズ株式会社）松戸アートピクニック
2024「和紙ぞめで作る、カラフルフラッグ」……p.48

鳥越亜矢（中国短期大学） 小西悟士（埼玉大学教育学部附属中学校） 重田祐貴（若井産業株式会社）全美協交流会「若井産業（株）で釘三昧」……p.54

【全美協規約等】……p.63

【エッセイ】

三澤一実（武蔵野美術大学） 全日本美術教育会議のことなど……p.70

Vol. 23

目 次

【会長挨拶】

■大成哲雄（聖徳大学）「大学造形美術教育研究」第 23 号の刊行に寄せて…… P.3

【指名レポート】 全美協造形教育フォーラム 2020 報告

■香月欣浩（四條畷学園短期大学 / 篠永洋（東北文教大学） / 仁木裕美（大阪人間科学大学） / 佐藤牧子（国際学院埼玉短期大学） / 重田祐貴（若井産業株式会社）「トントングコギコ」が、やりたい気持ちを ON にする ～釘の魅力～」…… P.4

【研究ノート・実践報告】

■石原綱成（高崎健康福祉大学子ども教育学科）保育現場における「壁面構成」の意義……P.16

■宇津木七実（関西女子短期大学）幼児の「刺す」からはじまるカラー釘の活動……P.20

■仁木裕美（大阪人間科学大学）シルクスクリーン印刷によるサコッシュ作り体験教室の記録……P.24

■林韓燮（名古屋柳城女子大学）地域と連携した子どもの絵具あそびの実践……P.28

■福岡龍太（新潟青陵大学短期大学部）あえて盛大にワークショップを行わない立案ーふうカメは木を観て森も観るー……P.32

■森高光広（東京未来大学）「造形制作実施時の留意点の再確認」～教育現場での造形教室実践を踏まえて……P.36

■山本将之（大阪大谷大学）シャボン液と口の接触を避ける手作り拭き具を用いたバブルアートの実践……P.42

■渡辺 一洋（育英大学）『イソップ物語を題材とした作品製作と表現』……P.46

【産学連携レポート】

■佐藤牧子（国際学院埼玉短期大学）引地貴子、福島夕貴（桂屋ファイングッズ株式会社）松戸アートピクニック 2024「和紙ぞめで作る、カラフルフラッグ」……p.48

■鳥越亜矢（中国短期大学）小西悟士（埼玉大学教育学部附属中学校）重田祐貴（若井産業株式会社）全美協交流会「若井産業（株）で釘三昧」……p.54

【全美協規約等】……p.65

【エッセイ】

■三澤一実（武蔵野美術大学）全日本美術教育会議のことなど……p.70

大学造形美術教育研究

23

「大学造形美術教育研究」第23号の刊行に寄せて

全国大学造形美術教育教員養成協議会
会長 聖徳大学 大成 哲雄

ここに第23号となる全美協（全国大学造形美術教育教員養成協議会）の研究誌をお届けします。全美協は、大学・短期大学で造形美術を教授する教員及び造形に関わる企業（賛助会員）によって構成される組織です。

研究誌は、本協議会の会則2条（目的）に示す「本協議会は、全国の大学及び短期大学における造形美術教育に関わる保育士及び教員養成の充実をはかり、造形教育の振興に寄与する。」ことの具体的な取組みとして20年以上の実績があるものです。第1号から今までの研究誌は、国立国会図書館にも納本されています。この研究誌の特筆すべき点は、多くの学会誌にみられる研究論文という位置づけでは無く、造形活動の探究的な実践報告が多いところです。ワークショップや大学での日常的な授業など、多様な取組みにあふれています。まさに美術造形教育の今を垣間見ることができます。

コロナ禍で中止や変更を余儀なくされていた造形活動も最近では思う存分できるようになってきました。実践報告では学生や子どもたちの生き生きとした様子が紹介されています。特に近年、賛助会員、企業との産学連携も頻繁に行われるようになってきており、年1回のフォーラムとは別に研究会やワークショップ等の機会が増えてきました。例えば8月には、カラー釘の若井産業と交流会を行い、社内ミュージアムツアーや釘制作体験、講義やワークショップ、実践報告を行いました。11月には「松戸アートピクニック」で桂屋ファイングッズ株式会社が染色のワークショップを行い、会員が活動の補助も行いました。いずれも多くの会員や教員、地域の様々な人の参加があり交流の場が生まれました。体験を通してそれぞれの専門性について意見交換ができる機会は、これからの保育士、教員養成の発展、充実につながるものだと思います。こういった取り組みが柔軟にできるのも全美協の良さだと感じています。

本研究誌は、このような造形・美術の活動を通して実践者が様々な角度から考察を行っています。どの内容も試行錯誤をしながら研究に取り組む姿が記録されています。それぞれの実践報告に触れることで、こういう方法、考え方があるのかという発見、そこから実践の深化やコミュニティの広がりにつながっていくことの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、本研究誌の発刊にあたり多くの方々にお力添えをいただきました。執筆いただいた皆様、編集作業を引き受けていただきました三澤一実先生、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

全美協造形教育フォーラム 2023 報告

「トントングコギコ」が、やりた い気持ちを **ON** にする ～釘の魅力～



■対象：教育・保育関係者を中心にどなたでも

■実行委員

・香月欣浩
(四條畷学園短期大学)

・篠永洋
(東北文教大学)

・仁木裕美
(大阪人間科学大学)

・佐藤牧子
(国際学院埼玉短期大学)

・重田祐貴
(若井産業株式会社)

■参加人数：37名(オンライン)

I. 企画について

1. 企画の経緯

出会いは偶然ではなく必然だと感じる出来事に遭遇した。実習巡回で行った幼稚園の向かいにイベント施設があり、多くの人が出入りし賑わっているのが見えていた。私は実習訪問を終え、惹きつけられるようにその施設へ入った。そこでは手芸を軸とした素

材企業が商品を販売し、ワークショップを行っており、200を超えるブースを構えた見本市であった。その中で異彩を放っている企業に目が留まった。

「釘」である！手芸の見本市に「釘」？という疑問が私をまさに釘付けにした。ワークショップもにぎ

わっており、釘を打つ金づちの音が心地よく会場に響いている。

「釘にご興味ありますか？」吸い込まれるような笑顔と気さくな声が私にかけられた。若井産業株式会社との出会いの瞬間であった。話しはとんとん拍子に進み、学生と一度会社の見学へ行かせていただくことになり、授業で釘の探求、そして全美協の造形教育フォーラムでの発表を行なおうということに発展した。

2. 実行委員会におけるテーマ・内容・方法等の検討

若井産業株式会社（以後、若井さん）の「カラー釘」を実行委員会で紹介したところ、「いいじゃない釘！」という予想を超えるいい反響であった。やるとなれば、加盟校で何校かで実施の上、発表し皆さんに共有していこうということになり、今回発表のメンバーに声をかけ、共同研究をすることになった。

Ⅱ．事例報告

1. 重田祐貴（若井産業株式会社）

「カラー釘ができた経緯と釘の現状」

(1) 実践の概要

世の中から減り続ける「釘」を何とか後世に残していきたいという思いで5年前に立ち上げた新プロジェクトのNail it!!（ネイルイット）。色とりどりのカラー釘と糸を使ってアート作品を作り上げるストリングアートというアートを楽しむためのブランドである。Nail it!! を広げていく活動の中で、四條畷学園短期大学の香月先生との出会いによって、本来の用途である建築でも、ストリングアートにおいても縁の下の力持ちとして目立つことのない「釘」が注目されることとなった。

先生方や学生の皆様に釘の作り方、釘の種類、釘の打ち方などをお伝えする中で、今まで想像もしていなかった釘の使い方、新しい表現方法が生まれ、私自身も新たな釘の魅力と出会えた。

(2) 実践報告

① 産学連携

これまで産学連携の経験もなく、就職活動以外で

学生の方々に会社訪問に来ていただいたこともない会社で先生方と学生の皆様をご招待して、釘の歴史、釘の作り方、釘を打つ、釘の新たな活用について話し合うなど、釘が主役の授業が始まった。当社に来ていただいた次は社員が学校にも訪問させていただき、学生の皆様と一緒にそれぞれの思い思いの釘遊びをして釘に触れあった。新しいアクションは釘にも会社にとっても新しい刺激となり様々な広がりへと繋がっていった。

② 釘が繋いだ新たな出会いと社員の変化

全美協に加盟されている学校だけでなく、その広がりには保育園や小学校にも拡大し、様々な教育現場で釘が導入されることとなった。また、本活動をきっかけに社員にも変化が見られた。新しい取り組みを広げていくことはいつの時代も容易ではなく、ましてや、これまでの若井産業の歴史でも教育関連で商品が取り上げられることはなかった。それが今回の活動を通して、社員が釘の歴史を学び、その魅力を再発見させていただいたことで、「修学旅行生の受け入れ」という新たな取り組みもスタートした。大阪に修学旅行に来た中学生、高校生たちがモノづくりの街である東大阪の歴史と新たな挑戦を学ぶ。人気コンテンツは「釘作り体験」。昔ながらの製釘機（釘を作る機械）を自分の手で回して釘を作る。これも先生方や学生の皆様が会社訪問で来られる際に楽しんでほしいという思いで当時は展示用として設置していた製釘機を調整し、実際に動かせるようにした。釘を作っている会社、というのを社員たちが自慢げに学生の皆さんにアピールする姿は間違いなくこの活動から生まれた若井産業の新たな発見であった。

(3) 実践を終えて

当社の製造している「釘」や「ねじ」は何かと何かを繋ぎとめるためには欠かせないものではあるが、目立たない、主張しないことも特徴として製造されているものがほとんどである。そのため日頃生活していても釘に着目することはまずない。そんな釘が打ちこんで何かを留めるだけでなく、様々な素材に刺したり、飾ったり、バラまいたり、音を鳴らしたり、磁石で動かしたり、身に着けたり、と今までに出会いもしなかった新しい形でその魅力を探求し続けてくださった先生方、そして学生の皆様に心より感謝申し上げます。

モノを作ってモノを売るだけが企業の役割と思い込んで仕事をしていたなかで、香月先生との出会いから始まった釘の探求はモノづくりの新しい可能性を感じる活動であった。完成したモノだけが人を幸せにするのではなく、歴史や製造過程、素材そのものにも魅力があり、教育という現場を通して、企業の存在価値を再認識する機会となった。世の中から減り続ける「釘」の第二章がここから更に広がりをもせることに期待したい。

2. 篠永洋（東北文教大学）

「木片でつくるオブジェにカラー釘を添えて～東北風」

(1)実践の概要

香月欣浩（四條畷学園短期大学）氏より、カラー釘を使った実践のアイデアをいただき、勤務先の大学生と付属幼稚園の園児、小学生を対象として造形活動を実施した。

①大学一年生（東北文教大学 人間科学部子ども教育学科）

後期に開講されている「図画工作」（小学校教諭免許必須科目）で、「木工作」の中で使用。2クラスリピートの授業で合計 58 名が受講。

②幼稚園の年長児（東北文教大学付属幼稚園）

年長の希望者を対象とした課外造形教室の中で使用。参加者 13 名。

③小学校 1～2 年生（とぶらぼ）

小学校低学年を対象とした造形教室（とぶらぼ）

のプログラムの中で使用。参加者 10 名（保護者 10 名）。

(2)実践報告

①題材を「3つの木片で作る手のひらにのるオブジェ」と設定した。

授業後の振り返りをテキストマイニングで分析してみたところ、「つなぐ」「接続する」「くっつける」という釘本来の目的とは別の使い方をしていることがわかった。つまり、カラー釘自体を何かに「見立てて」「より際立たせる」という使い方と共に、ペイントや木片の中に「馴染ませ」て「目立たなく使う」〈写真 1〉という、大きく二通りの使い方の傾向があるということがわかった。

②引率の先生に確認したところ、幼稚園では釘を打つ活動をしたことが無いということだった。

全員が初めて釘を打つということで、安全に配慮しながらの活動となった。最初は、どうしても手を打ってしまうのではないかとという恐怖でげんのを打ち込む力が弱く、なかなか釘が材の中に入っていく子どもが多かったが、次第に慣れてくると、色の配置によって打ち込む場所を考えたりしながら楽しんでいった。〈表紙写真：幼稚園年長児の実践〉の子どもは開始 5 分ほどで要領をつかみ、ひたすら打ち込むことを楽しんでいた。

③小学校 1 年生（昨年まで付属幼稚園の課外造形教室に在籍していた）が殆どで、実際に釘を打ったことがある参加者は多くないだろうと予想して兎に角釘をひたすら打ち込んでもらう活動とした。木を選ぶ

着色がばった系

馴染ませる～目立たなく使える



写真 1 大学生の作品

～釘を選ぶ～選んだ木に釘を打ち込んでいく。という流れである。とはいえ、打ち込むことに慣れてくると、次の展開が欲しくなるとい、中盤にたこ糸と毛糸を投入して、活動に変化と展開が出るようにプログラムした。

(3)実践を終えて

大学生にとっても、やはり釘を打つという行為は「非日常」的な行為と言えるようであった。木工作の中だと、切る～組み合わせる～接合する等の工程を経て着色することで完成するが、釘自体を装飾として使用することで、表現手法のバリエーションが広がっている。実際にカラー釘を使う際にどのような工夫をしたのかを振り返りシートに記載してもらったが、部材を接合するという本来の使用方法ではなく、自分の表現を豊かに広げる材料としての工夫に触れた内容が殆どであった。保育者や小学校教諭を目指す学生にとってはカラフルな釘という素材を認知して活用する具体例を知る機会となった。

次に、幼稚園の園児は、「釘を打つ」という行為そのものも楽しんでしたが、釘を打つ場所とは別に釘を選ぶ場所を設定していたため、そこでいろんな色の釘を選んで小皿に取り、それを自分の場所に運んでから打ち込んでいた。その「選ぶ」行為も楽しんでいる様子がみられた。実際、打つ時間と同じくらい選ぶことに時間をかけて楽しんでいる子どももいた。そして、色の選択肢が多いことが、次々に釘を打ち込んでいきたいというモチベーションをあげることに作用していた。

小学生になると、自分でコントロールできる部分と、保護者に手伝ってもらいながら自分の作りたいイメージを具現化していく様子がみられた。今回の活動については、釘を打ち込むことで、変容していく釘を打ち込まれた木片をみながら、イメージを膨らませて実用性ゼロの「モノ(オブジェ)」〈写真2〉として仕上がりていく姿が多く見られた。これも、カラー釘が作用した結果であると考えられる。

3. 香月欣浩（四條畷学園短期大学）

「釘を通したモノ・コト・人との出会い」

(1)実践の概要

日頃から学生たちを含め、教員も閉じた学校の中で、「小さな学び」をしていることが習慣化し、そのことに疑問さえも感じない状態になっている。そこで学校が自ら「開かれた学校」を目指し、企業や地域との連携ができれば、もっと広く深い学びが生まれると考えていた。

企業である若井産業株式会社様との出会いとご協力によって、ゼミの学生たちは学校を飛び出し、企業訪問で「歴史や製品への思い、そして未来への願い」も聴かせていただいた。さらにワークショップで釘の制作をさせていただき、今までに出会ってこなかった素材と出会い、新しい体験の機会を得ることができた。

また学校に帰ってからは、「釘の探求」ということで、学生個々に「釘で何ができるのか？」というテーマで釘と向き合うこととなった。



写真2 とぶらボにおける小学生の実践

そして学生たちは「新しい価値」を個々に生み出し、「新しい自分」と出会うこととなった。

(2)実践報告

釘との出会い、そして活動によって、関わった私たちは「社会」「人」「材料」「道具」「作品」「新しい自分」と出会うことができた。その活動を以下に示す。

①企業訪問とワークショップ体験

若井産業株式会社へゼミの学生 12 人と訪問した。そこでは釘の歴史や会社の変遷などのお話を聞かせていただき、学生たちは釘への興味を深め〈写真 3〉、さらにワークショップによって釘の魅力に引き込まれていくこととなった。ワークショップではカラー釘を板に打ち、さらに釘にカラフルな糸をかけて、絵や模様を完成させていった〈写真 4〉。心地よい釘と金づちが打ち合う音に包まれる中、学生たちは制作を行なった。まさに視覚と聴覚、触覚を働かせての活動であった。

②授業内の素材探究

企業訪問で釘の特性や魅力を知った学生たちは、学校に戻り、3週かけて「カラー釘の探求」を始めた。釘と組み合わせる素材はプラスチック、木、発泡スチロール、傘の柄、毛糸、ビーズ、輪ゴムなど多岐にわたった。また組み合わせる素材によって、「打つ」のか「差す」のか「入れる」のか行為にも変化が見ら

れた。釘は本来、打つと釘頭以外は見えなくなるものだが、透明なペットボトルなどに打つことで、釘本体の色と形をみることができ、釘の美しさを再発見する表現も生まれた〈写真 5〉。

③保育現場の釘事情

保育現場では釘の活動は行われているのか、ひとつの幼稚園を訪問して、お話をお聞きすることができた。4歳のクラスでは釘打ちの玩具で釘を打つことの楽しさをまず知り、5歳になったら、本物の釘と金づちで釘打ちをするという〈写真 6〉。ただ釘で椅子や台などをつくることはあえてせず、幼少期には「釘打ちを楽しむ」ことをねらいにしているということであった。

(3)実践を終えて

この実践は企業様との出会いによって、学校が開かれた教育を実現可能にする取り組みであったと考えている。どうしても時間割や学校の決まりに縛られ、教室での授業が主となっていた日常に、新しい風が吹き込んできて、学生も教員も新鮮な気持ちで新しい素材と向き合い、新しい人との関わりも生まれた。まさに「釘を通したモノ・コト・人との出会い」である。さらにつくるものをあらかじめ決めた授業ではなく、「この素材で何ができるのか？」という探求が企業様の願いと学校の授業のねらいと同じこと

も相まって、相乗効果が見られたと考えている。具体的には学生にとっては新しく魅力的な素材と出会え、日頃はしない行為（打つ）を実践しながら、つくり、つくりかえ、つくるを重ねた。その結果、今まで見たこともない作品、やったこともない活動を創出できた。学生が釘を探求する授



〈写真 3〉 釘とネジの歴史展示コーナー



〈写真 4〉 ワークショップでの作品

業を見学していただいた企業様からは「釘はそのような使い方ができるんだ」「釘ってそんな性質や魅力があったんだ」と価値の再発見につながるご感想をいただいた。これを契機として、今後はさらに学校の外にある「モノ・コト・人」とつながりを持つ「開かれた学校」を目指したい。そして今回の経験をした学生たちが将来、保育者となった時に、「開かれた保育現場」を目指して子どもや保護者そして地域や社会と共に、新しい価値を創出していてくれることを期待している。



〈写真 5〉釘をペットボトルに打った表現



〈写真 6〉釘を打つ5歳児

4. 仁木裕美（大阪人間科学大学）

「五感で感じる釘の探究活動」

(1)発表の概要

近年、釘よりもネジが主流になり、性能の高い接着剤の開発が進む中、ものづくりにおける締結材としての釘の出番は減少の一途を辿っている。とはいえ、金づちや玄能といった手動工具でトントンとリズムよく釘を打つ行為は気持ちよく、なんとも言えない魅力がある。そのような背景を考えた時、学生らは釘に対して一体どのように関わるのだろうかと思い、締結材としての釘という性質を取り入れながらも「釘を打つ行為」に注目した活動がしたいと考えた。

そこで、筆者はまず釘と人との関わりを概観し、学生と共に実践を行うことで、釘を打つ行為が持つ意味を考察した。釘と人との関わりについては、釘に関連する諺、アーティストによる立体作品（ギュンター・ユッカー）、映像作品（寺山修司、King Gnu）、

民間における呪術伝承（コンゴのンキシ・コンディ、丑の刻参り）などを取り上げ、人間の釘の捉え方を探った。これらの例から、釘を打つ行為は、個人的、あるいは、宗教的な儀式として感情や信条を昇華させる意味を持つのではないかと考察した。詳細は、仁木裕美（2023）「釘を打つ行為にみる精神性についての一考察」大学造形美術教育研究(第 22 号) pp.38-41 を参照されたい。

(2)実践報告

釘と人との関わりを概観した後、本学で図画工作を履修している学生5名（4年次生2名、1年次生3名）の学生と「釘」の探求活動を始めた。まずは、2023年11月27日に若井産業さんの会社を訪問した。釘にまつわる歴史を学び、ストリングアートを体験することで、普段なかなか意識することのない「釘」を身近に感じる機会を得た〈写真 7〉。



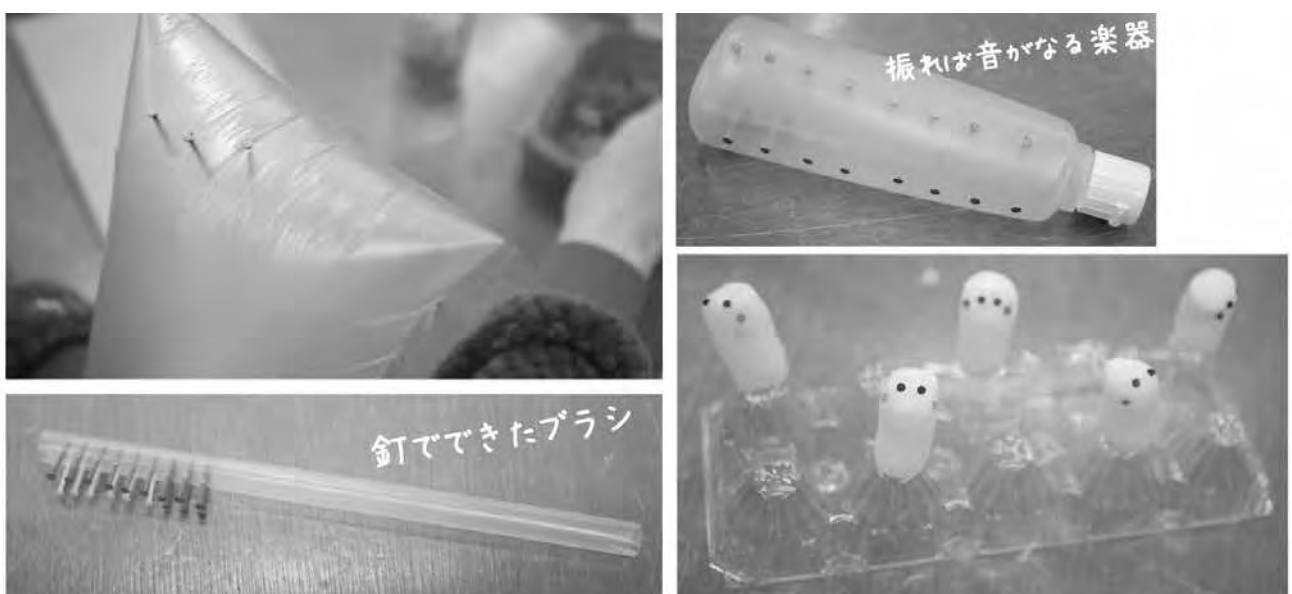
〈写真 7〉 若井産業株式会社でのワークショップ

「釘打ち」は、中学校の技術家庭科で経験していることから「真っ直ぐに綺麗に打たなければならない」と考えている学生が多い。そこで、翌週の授業では、金づちを使わずに「釘で何ができるか」を探る活動から始めることにした。単に材と材を接合するための「締結材としての釘」ではなく、「オブジェとしての釘」という見方をする事で、学生たちの持っている概念を壊し、釘が持つ可能性を問い直せるのではないかと考えたからである。最初は、空き箱や食品トレイなどの様々な廃材に釘を刺していくことで、相手材によって違う音や刺すときの感触をじっくり味わう活動を行った〈写真 8〉。釘を刺した廃材を裏返すと別の

表情が現れるので、釘の体は隠すものだという概念から解放されたようにも感じた。

さらに、刺した後に生まれる音、刺すときに生まれる音などの発見を楽しみながら、釘を刺す感触や音が心地よい素材と釘の組み合わせを探す時間となった。そこから、釘のアクセサリ、釘のスノードームなど刺さない釘の探究につながっていった。

釘にたっぷり触れたあと、やっと金づちを持って釘を打つ活動に入った。五寸釘を初めて手にしたこともあり、外に出て土に五寸釘を打ち付けてみると、土の感触を感じたり、重ねた落ち葉をつなぎとめたりする様子が見られた〈写真 9〉。さらに、石を金づ



〈写真 8〉 色々なものに釘を刺してみる



〈写真9〉土に五寸釘を打ってみる

ちで叩く音遊びにも発展した。

そして、日を改め「釘を使ったコラージュ」の制作に入った。概要は以下の通りである。

材料:合板(三六判、12mm厚)、アクリル絵の具、カラー釘、廃材、布など

テーマ:今の気持ちを1枚の板に表そう

手順:①コラージュの概要説明 ②アクリル絵の具によるペイント(15分程度)③釘を打つことによる廃材のコラージュ(40分程度)④鑑賞

結果的に出来上がった作品は〈写真10〉の通りである。部分的に見ていくと、接着剤では貼りにくいストローを曲げて釘で留めたり、今は離れている故郷

に関連する言葉を空き箱から切り取り、釘で打ち込む姿もみられた。釘を斜めに打って上から叩き、素材を押さえる工夫も見られた。新聞紙の切り抜きに釘を打ち、糸をかけることで表現を強調させたり、絵の具で釘を埋めて固めたりする表現も見られた。これは事前に「金づちで打たない釘の活動」があったからではないかとも考えられる。また、絵の具を金づちにつけて釘の頭を打つと、打つたびに釘の頭の色が変わって面白いという発見もあった。ストローで作った藁人形に五寸釘を打ち込んだりしつつも、黒いレースのリボンを付けてポップに変化させている〈写真11〉。



〈写真10〉釘を使ったコラージュ作品の全体

釘を打ってコラージュ！



〈写真 11〉釘を絵の具で埋めて固める表現とストローでできたポップな藁人形

最後に、これまでの釘の活動を学生のワークシートを中心に振り返った。「釘を打つ」行為によってどのような気持ちになったか、なぜそのような気持ちになったかを問う質問に対しては、「リズムよく打つから楽しい」「力を込めて打ち込めるからストレス発散になる」「無心に釘を打ち付けられたから集中できた」「指を叩くと痛いかも知れないから不安だった」などの回答が得られた。打ち付けることが気持ちよかった素材とそう感じた理由については、「魚の醤油入れ：最初は醤油入れだけを貫通し、あとはどんどん木の板に刺さっていくのを感じたことで、ものどもの釘で重ね合わせていることを感じられたから。」「布：布を通して木の板に刺さる感じが好きだった。」「ストロー：ストローに釘を金づちで打つのは難しいが手で刺す方が簡単だ」などの回答があった。釘と接着剤は、どちらもモノとモノを接合するという機能を持つことを踏まえ、その目的を達成するための異なるアプローチを探る意味で「釘を打つ」行為と「接着剤で糊付けする」行為との違いは何かという問いかけをした。これに対しては、釘と接着剤では固定するものに対する思いやそれを見る人に対して伝えたい思いの強さが変わってくるのではないかと、という回答があった。つまり、釘を使うのと接着剤を使うのではメッセージの意味が変わるのではないかと解釈していることがわかる。

これまでに釘に触れてきた経験を踏まえた活動の

感想を1つ抜粋する。「人生のうちで、こんなに釘に触れることはなかなかないのでただ釘でこんなに楽しむことができるのかという驚きがいちばん大きいです。釘は木材を固定するだけのものと考えていたから、触れてたくさんの作品を作る中で触っていたあとの釘の臭いが手に付いていたり、釘が重なり合う音を聞いたり打ち付けなくても釘自体を楽しむ時間もあって楽しかったです。(原文ママ)」このように、釘に対する固定概念が変わったという経験について述べている学生が多かった。

フォーラム発表の最後には、学生が制作した「釘だけの音を映像と共に採集する」ASMRの動画をいくつか紹介した。ASMRとは、自律感覚絶頂反応の略で聴覚への刺激を楽しむ動画や音声のことであり、Youtubeでも人気の動画ジャンルの1つである。釘をかき混ぜる音と映像〈写真 12〉やメラミンスポンジに青釘を刺す音と映像など、音と映像という切り口で迫る試みであった。

(3)実践を終えて

五感を通した「釘」の探究を行うことで、釘が持つ可能性の問い直しを試みた。トントんと釘を打つリズムミカルな反復行為に対して、対象物は「音」や「体に響き渡る振動」で応答してくれる。その応答が、多くの学生が感じた気持ちよさやスッキリ感に繋がっているのではないかと考える。また、接着剤とは異なり、釘を打つことによって対象物は破壊され、同

ASMR



〈写真 12〉学生の釘を使った ASMR の動画

時に新しい創造が生まれる。つまり、釘は創造と破壊という相反する営みを同時に生み出す素材であることを改めて感じた。釘は、締結材としては脆弱な部分があるにしろ、五感に強く働きかけるポテンシャルを持ち合わせており、ネジやボルトでは替えの効かない存在であることを再確認することができた。表現するプロセスの重要性を考えた時、AIは「結果としての作品」を提供できるが「精神に働きかけるプロセス」を提供することは不可能である。今後の表現活動においては、表現におけるプロセスの意味を常に問い続ける必要があると感じた。

Ⅲ. 参加者アンケートについて

フォーラム開催後、参加者に対して Google forms によるアンケートを行った。その結果を以下に示す。(自由回答は原文ママ)

■回答者概要

回答者数：14 名 内訳：教員養成校教員 (78.6%)
その他 (14.3%) 保育現場 (7.1%)

質問① 教育現場において、釘を使った実践を行ったことはありますか？

ない 57.1% ある 42.9%

質問② 教育現場における「釘を使った実践」の課題があれば教えてください。

- ・危険かもしれない、と思う保育者(教員)側の意識のハードルと材料・道具の入手、管理の課題があるのではないかと思います。
- ・保育現場などだと見守りに人員を割くことが難しい、造形活動で廃材と釘を使おうという発想に至ることができる大人が多くない
- ・小学校中学年で板材に打ち付ける活動を、児童が夢中で行った記憶にあります。先の尖ったものは敬遠されがちですが、扱いを知り体験することが造形の知として大切かと思います。
- ・子どもの経験不足を補うだけの安全確保が難しい。
- ・昔の大工さんのイメージは、今の子供達の日常にはなく、釘やトンカチは、どちらかというところ工の中にあるものとなっている気がします。制作することに困難はありませんが、文化(木造建築を支えた大工の仕事を含め)としてもしっかり伝えていく必要があるのかな、と感じています。

質問③ カラー釘を使った活動に興味はありますか？ カラー釘を使った実践、または今後行ってみたい活動があれば教えてください。

- ・大変興味があります。網戸の網を使った様々な

造形物や磁石を使った遊び方などいろいろ考えたいです。

- ・公開講座などで、釘をテーマに造形活動を行うのも面白いと思いました。大人も子どもも、楽しみとして釘に関わる経験は乏しいと思うので。
- ・カラー釘に興味を持ちました。保育幼稚園教育の現場での釘の活用方法を学びたいと思いました。また身近な植物を活用して、染織を養成校の授業に取り入れたいと思っています。
- ・興味があります。見栄えもすごくキレイですし、今までの釘のイメージが変わりました。まずは柔らかいものに打ちつけて、学生にも親しみを持たせたいです。
- ・このフォーラムに参加して、カラー釘を使ったワークショップを行いたいと思いました。特に、ペットボトルに釘を刺していたものと、網戸の網に釘を刺していたのを行いたいです。そして、ペットボトルの作品を精神科デイケアの音楽の時間に、みんなで鳴らして即興音楽を楽しみたいです。
- ・カラー釘の魅力を活かして、打ち抜かない釘の使い方を色々実践してみたい。
- ・ASMR
- ・身体的なアプローチとして、トンカチでうちこむことで得る釘の魅力は大事にしたいと思っています。なので、昔ながらの遊びのパチンコのようなシンプルな作品も大切かなと思うので、実践してみたいです。今だからこそ、昔の文化(遊び)を図工を通して知ることになるかなと。

④質問4 感想をお聞かせください。

- ・オープニングから進行、発表内容、すべてにおいて先生方の探究心と好奇心を感じられてとても面白かったです。
- ・学生や保育現場の先生が参加しているのは、とてもいいです。
- ・釘は打たなくても遊べる、磁石と釘、豆腐パックに釘など、驚きとワクワクをたくさんいただきました。釘を打つという行為自体に注目すると、保育現場で遊べないことは、もったいないと思いました。素材の可能性を探る方法も、今回学ぶことができました。大勢でやるとさらに、こんなに楽しいですね。

- ・初めてこのようなフォーラムに参加させて頂きました。釘といえば木に金づちで打ち付けるものと勝手に思っており、柔らかい素材に手で押し付けるという方法を知ることができ興味深かったです。幼い時から自宅に廃材や釘、金づちがいつでも使える恵まれた環境で育っていたにも関わらず発想が凝り固まっていたので、危機感も覚えました。
- ・まだ養成校での勤務歴が浅く、経験や知識が乏しいですが、何か参加できることがあれば参加させて頂きたいと思いました。
- ・釘の材としての可能性を多層な面からご発表いただけて、大変勉強になりました。
- ・大変勉強になりました。今後授業で取り入れて、「子どもたちにもさせたい」と思う学生を増やせたら良いなと思いました。まずはストリングアートを自ら試してみたり、香月先生のペットボトル作品を参考にしたり、ストローに刺してみたいと思いました。ちょうど今月、木の実幼稚園さん(大阪松原市)の造形展を拝見させて頂いていたので、お話にも挙がり、年少時もプッシュピンをホースに刺した作品を見てきていたので、あまり何歳児さんだから出来ないと思わないように、上手に学生にも伝えられたらと思いました。仁木先生の釘を扱った作家のご紹介や呪詛と釘のお話、学生さんとの取り組み(カナヅチなしで釘をさす、刺さずに作る)のも楽しかったです。まずはカラー釘を手に取りたいと思いました。ありがとうございました。
- ・(中略) 釘が「モノとモノをつなげる役目」という事から、「釘が障害を持った方と地域の人をつなげる役目」を、カラー釘のワークショップをする事で出来るのでは無いかと思いました。浦河は、競走馬を育てている牧場が多くあり、馬の蹄を守る為に付けている蹄鉄は、馬の足に釘で打ち込んでいるので、おそらく曲がった釘は、蹄鉄と一緒に大量に廃棄されていると思います。なので、その蹄鉄に使った、曲がった釘とカラー釘を使って、障害を持った人と地域の人と一緒にワークショップを行う事により、障がい者と地域の人との交流会だけでなく、地域の産業廃棄物に価値が生まれるのでは無いかと思います。
- ・釘を通して、時代と共に図工のなかでの物事の

価値観や意味が変化していると、あらためて感じました。材料や道具は、生活との関係が重要だと思っています。その意味で、図工のなかで当たり前に使われているものが、現代の生活のなかでは当たり前でないのであれば、その伝え方を変えていく必要があると、考えさせられました。

⑤質問5 今後、全美協のフォーラムで取り上げてほしいテーマがあれば教えてください。

- ・異分野と造形美術教育のコラボレーション
- ・幼児教育の現場に実際に行ってオンラインでみんなで園を訪問するなど、面白いかも。そのまま大学の講義で使えるとさらにいい。ただし、どのような園を選ぶかが大事だと思います。
- ・子どもの絵と大人の絵の違い、筆の正しい使い方
- ・釘のように日本の素材だが、保育幼児教育の現場ではあまり馴染みのない素材の活動実践例を学びたいです。
- ・自然物での作品作り、レジャエミリア市の取り組みなど。(紙、絵の具、粘土が多くなってしまうので、素材を広げたいです。)
- ・障がい児の美術教育について
- ・テーマというより運営方法になりますが、可能な方には事前に扱うテーマにそって取り組みをおこなっていただき、当日のパネリストの発表の後に、司会者が紹介したりするのも面白そうだと思います。
- ・少し先の未来を感じる保育、教育の造形実践例の紹介

IV. 最後に

はじめは「突然」で研究は広がっていくことを感じています。それは「人と人」との出会いと、「人とモノ」とのつながりによって、連鎖反応で広がってきました。そして今もとどまる事を知らず、広がり続けています。モノが人と人をつないでくれ、人がモノとモノをつないで、新しい価値を生み出していきます。今回は「全美協」という組織を介することで、「モノ・コト・人」とのつながりが加速的に広がっていきまし

た。

人と人がモノを通して出会い、会話をする中で生まれた今回のご縁。その関係性がこのフォーラムを通してさらに色々な場所に広がり、活動の内容も参加される方もジャンルを超えて広がっていくことが予想されます。

人は元来、ナニかと誰かと出会い、五感を使って感じ、考え、判断して行為を行ないます。この出会いが大工さんとの出会いが少なくなってきたように減ってきたように感じます。

ただモノや人は昔と変わらず、私たちの周りには溢れています。それに気づける人が減ってきただけなのかもしれません。それに気づかせてくれたのが今回のフォーラムだと思います。

今回はカラー釘との出会いでしたが、世の中にはまだまだ、多様なものが存在します。そのすべてに意識を向けること、気にすることが新しい価値を創造する「目」を養うことになると考えます。フォーラム内の質疑応答や皆さまにご協力いただいたアンケートを再考することでもそれは可能です。

このフォーラムをきっかけに見るものすべてが初めての幼児のように私たち大人が「ゼロ0」の気持ちで好奇心を持って生きること、見え方が変わり、まわりの社会や文化が変わり、世界が変わっていくことを期待しています。

今回の研究は学校や地域を超え、教育機関だけでなく、企業様との協働によって、新しい価値を創り出すことができました。しかしこれで終わりではなく、このフォーラムで興味を持たれた方々が、また更に価値を重ねていってくださることを期待しております。

最後になりましたが多くの仲間、賛助会員の企業様と今後も研究を広げ、深めていきたいと思います。それができるのが全美協です(^▽^)/ 毎月のメルマガへの感想、研究や実践のご報告などを気軽にメーリングリストを使って書き込んだりして、今回のフォーラムを釘が繋がってくれたように、多くのみなさんと今後もつながっていききたいと強く思っております。

謝辞

今回の研究にご賛同いただき、ご協力いただいた若井産業株式会社様、美術教育フォーラムでの発表の機会を設けてくださった全美協の皆様にご心より御礼を申し上げます。

保育現場における「壁面構成」の意義

高崎健康福祉大学子ども教育学科 石原綱成

はじめに

「壁面構成」は、その本来の意味を追求されているとは言い難く、保育者にとって労力と時間を要する「慣行」となっているという現実がある。今日保育業務の多忙さから壁面構成を制作する時間は保育業務外であることから壁面構成を制作することが「負担」という保育者の声があげられている。壁面構成は果たして本当に保育現場において必要な環境構成なのだろうか。保育者の「自己満足」な壁面構成と幼児にとって「意味のある」壁面構成の相違点は何なのだろうか。

こども園・幼稚園の室内には、様々な情報を提供するための掲示板や、子どもの作品で装飾された壁面を目にする。保育室内の壁面を保育者や子どもの作品等を装飾し、様々な情報を掲示し、意味のある空間を構成することを壁面構成、壁面装飾と呼ぶ。

幼児教育は環境を通して行うものであるため、こども園・幼稚園における壁面装飾は、保育における生活空間、生活環境を構成する一部としての役割を果たしている。今日、保育室内の装飾は、園内の環境づくりにおいて積極的に取り入れており、こども園・幼稚園らしさ、可愛らしさの一種の象徴となっている。

壁面構成とは

こども園・幼稚園の室内には、様々な情報を提供するための掲示板や、子どもの作品で装飾された壁面を目にする。保育室内の壁面を保育者や子どもの作品等を装飾し、様々な情報を掲示し、意味のある空間を構成することを壁面構成の意義と言える。主な制作の方法は、型紙を用いそれに沿って色画用紙を切り出し、各部品を貼り付ける。内容は持ち物や席順などを言葉で説明せずイメージ（動物

などのキャラクター）や春夏秋冬の行事（クリスマス、ハロウィン、運動会）などがある。要するに教育的壁面構成と保育室内を楽しい空間とする壁面構成に分類されるであろう。

そもそも、制作者となる保育者は、何を意識し、何をねらいとして制作しているのだろうか。壁面構成の根本的意義について論じられることは非常にまれである。壁面構成には保育室を楽しく演出する効果や、子どもと保育者の対話を促進する効果があると考えているにもかかわらず、保育雑誌やマニュアル書を参考に低予算・短時間で制作する必要があると考えていることが分かる。保育室は子どもが園生活の多くの時間を過ごす生活の場であり、室内の壁面は生活空間の質を左右するものと言い得る。したがって壁面構成は子どもたちの表現の場であるとも言える。子どもが何を日常的に目にするのか、どのような視覚的情報に取り囲まれて生活を送っているのか振り返り、壁面構成の質的課題を保育者は再検討していく必要があるのだと考える。

M 幼稚園の作例

実際に壁面構成を積極的に取り入れている高崎市の幼保連携型認定こども園 M 幼稚園では、壁

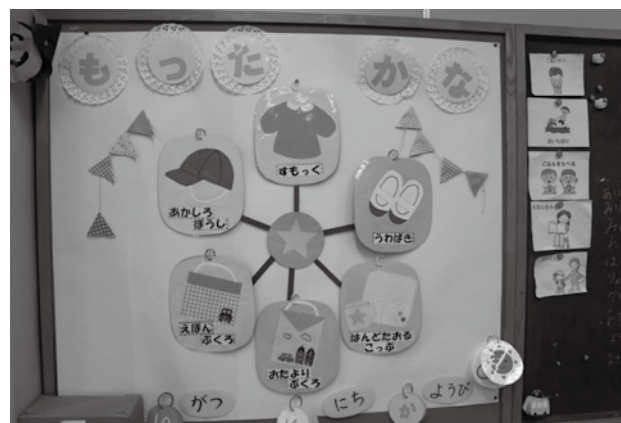


写真1 もったかな

面構成を教育の現場に非常に効果的に用いている。そこから分かったことは、壁面構成は前述の「自己満足」などではなく壁面構成から、子どものことを「第一に考えて」制作して、「先生から子どもへのメッセージ」が込められている壁面構成で、子どもにとって「意味のある」壁面構成である。紙面上すべての壁面構成を紹介することはできないが、いくつかの作例を紹介しよう。

<もったかな>

写真1は園児が持って帰るものとそうでないものが裏表になっており、その日に持って帰るものを毎回保育者が言わなくても、子どもが見て確認し自ら進んで支度ができる。これはどのクラスにも共通している。

<トイレのスリッパ>

写真2のトイレのスリッパの写真は、綺麗にそろえてあるスリッパと散らばっているスリッパの写真を横に並べて掲示することで、見て分かりやすく、子ども自身がそれを見て自発的に揃えるようになり自分で考えて行動できる。スリッパは動物のシールで色分けされており、その色同士を組み合わせることで揃えることのできる工夫がされていた。これは整理整頓を視覚的に表現した例である。

<机配置表・子どものマーク>

写真3・4は台紙を机として見立て、見るだけで自分がどの席に座るのがわかるものである。このマークはお道具箱等、あらゆる箇所に共通して使用されており、文字で書かれた名札よりはるかにわかりやすい。自分のマークを見て保育者が指示しなくても自分で席に座れるようになっている。どの保育室内を見ても子どものロッカーやクレヨン、お絵かき帳などの道具には必ずこのマークがついていた。

自分のマークを作ったことで子ども同士でも「これは～のマークだからここだよ」と教えあう姿が見られるようになった。このマークに子ども自身が愛着を持つことで子どもの自立を促している。

<声のボリューム表>

これは、他でも見られる一般的なものであるが、保育者が話を始める時や大きな声で話している子どもに対して使う壁面である。大きな声や賑やかな場所が苦手な子どももいるので「大きい声だとお友達がびっくりしてしまうね」と表を使って説明している。「うるさい」「静かに」という言葉は子どもにとっては

伝わりにくい言葉であるのでこの表で、具体的に目に見える形で、音量を理解してもらっている。

M 幼稚園でのK 教諭へのインタビューより(抜粋)



写真2 どちらが気持ちいいかな



写真3 机配置表



写真4 子どものマーク

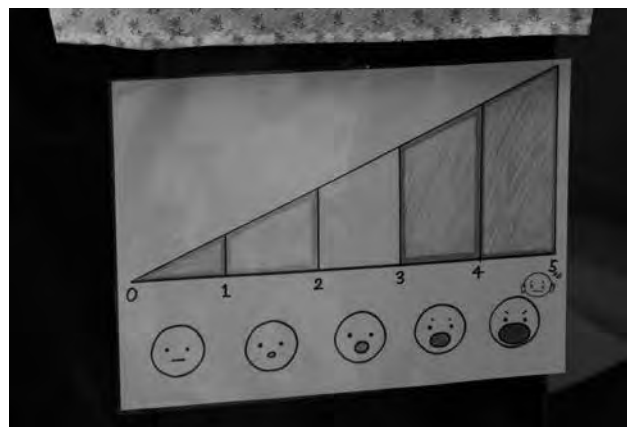


写真5 声のボリューム表



作例紹介 お誕生日 クラスによって個性が際立つ

・壁面構成の制作全般について

季節のものは季節に間に合うように、休みの

日に作ったりとか長期休暇の時に作ります。春は特に学年の入れ替えもあって部屋も変わるので部屋ごと引っ越しをしなければならないので、外す作業と新しく貼る作業を同時に入って、朝から夕方まで休みの短い期間で作っている先生が多い。

・掲示位置への配慮

掲示の位置は子どもの目線を大切にしている。触って危ないものは上に貼り、子どもが動かすような壁面だと子どもが手に届くところにしている。

ドアを入るときに先生の顔などは子どもの目の位置にしてあります。何に使うかと誰に見てもらおうかで変えている。

・子どもと壁面を作る時の言葉かけ

ハロウィンの壁面を制作する際、「ちょっと見て見て、おばけ何匹いる?」と言って「2匹しかいない」との返事に対し、「そう寂しいからみんなも作ってくれたら嬉しいな、お友達増やしたいんだよね」と声掛けしておばけの制作に入る。子どもたちも「あそこ

ボクが作った」と先生と一体感が作れた。その後、折り紙でカボチャを作ったり、おばけを作っている様子があったので、先生も「もっといっぱい飾りつけしたいから、もっと作ってと話をしながら作品が増えていった。

・壁面構成の効果

保育室に入ってきた時に「なんか楽しいな」とか「きれいだな」という雰囲気を感じてくれればうれしい。また、クラスによって壁面構成が全く違うので、クラスの一体感ができる。そして季節ごと、行事ごとに変化するので、気持ちがウキウキしてくれていると思う。

・壁面構成の保存と再利用

工夫して1回ラミネーターで切って違うものに貼ったり、工夫をしている。作った時は気分が良いが、子どもが触れば壊れるし、結局消耗していくものだ。乱暴に子どもが扱っても大丈夫なようにラミネートや補強をしている。また、ラミネートしたものを切ると、縁がギザギザになり子どもの怪我が心配なので、やすりで丸くしている。これが結構大変です。



作例紹介

お誕生日 クラスによって個性が際立つ・クリスマス・ハロウィーン キリスト教への深い造詣がうかがえる

また、どんなに丁寧に作っても子どもにわかりにくかったら意味がないので形を簡略化しているものもたくさんあります。簡略化は全て先生の技術なので、1年目の先生などは細かく作っているけれど伝わらないことがある。とか、道路標識のようにシンプルにした方がわかりやすいってこともある。手間をかけたから子どもに伝わるかってことはまた別の問題なので難しいところ。

おわりに

壁面構成の現状を現場の作例とインタビューを通して考察してきたが、壁面構成は保育者の負担だけでなく子どもたちとのコミュニケーションに重要な役割があることが明らかになった。

バーバルコミュニケーションが未熟な幼児にとって、視覚的なアプローチは必然的であろう。

先生からの一方的な指示ではなく、相互に理解しあえるために、壁面構成の意義は見直されなければならないであろう。

子どもが何を日常的に目にするのか、どのよう

な視覚的情報に取り囲まれて生活を送っているのか振り返る、すなわち実際に保育者自身が子どもの目線に立って考えてみるのが重要である。

また保育者も壁面構成を「何の目的で作る」のか、誰のための壁面構成であるのかを意識し、その質的課題を保育者は再検討していく必要があるのだと考える。

参考文献

- ・幡野・山根・小田倉「保育環境における壁面装飾の意義1—幼稚園教員・保育士への質問紙調査から—」『埼玉大学紀要』No.58、2009年
- ・樋口一成『幼児造形の基礎—乳幼児の造形表現と造形教材』萌文書林、2018年
- ・豊泉尚美『こどもとつくる壁面構成&デザイン』黎明書房、1995年



幼児の「刺す」からはじまるカラー釘の活動

関西女子短期大学 宇津木七実

1. はじめに

保育現場では、木切れや木材を材料として扱う場合、幼児でも簡単に接着できる木工用ボンドが使われることが多い。接着する際に、特別な道具や技術がなくても使える木工用ボンドは、幼児の想いを表現するのに相応しい材料である。しかし、古くから使われてきた釘には、その特性を生かした接合の仕方があり、釘での接合によってできる表現がある。幼児にも、興味をもって釘にふれたり、釘を使った造形活動をしたりする経験をしてほしい。全美協交流会「若井産業(株)」で釘三昧¹⁾では、釘を表現材料として扱った幼児の実践が紹介された。その報告をヒントに、筆者の勤務校附属のK幼稚園の保育者に、専門的な木工の知識や技術がなくて

も指導可能な釘の造形活動を提案し、実践を試みた。

本稿では、いろいろな色があり、細くて先が尖った、「刺す」ことができる材料として、幼児が釘と出会い、他の材料と組み合わせてどのように活動が展開したかを報告する。

2. 問題点

「釘を打つ行為」と精神性には繋がりがあるとした仁木(2023)は、「幼児にとって体を使って打つ行為は世界とのコミュニケーションでもある。」と言及している。子どもにとって釘を打つあそびや釘でつくる活動は楽しい活動である。乳幼児のおもちゃに、木製のハンマーで打つ行為²⁾を楽しめるものや、釘をハンマーでコルクボー

ドに打って形をつくるものがある。実際の木材と釘でつくる活動も、幼児から年齢や男女に関係なく楽しめる。筆者が携わっていた幼児以上を対象とした造形絵画教室でも、ハンマーで打つことや、釘の頭を点に見立て木材に打ち込んで模様をつくっていた子どもたちは、「手が痛い」「上手くできない」と言いつつも、根気よく取り組んでいた記憶がある。しかし、釘でつくる活動には、釘の先が尖っていて傷つける、釘をハンマーで打つ音が大きい、力が弱いと木材に打ち込めない、指をハンマーで打ってしまう等、保育者が保育に取り入れることに躊躇するであろう面がある。また、ボンド接着の普及等で、家具などの木工品制作や建築に使われていた釘は、昨今の生活の中にその存在を探すことが難しくなっている。小学校や中学校の授業での、木切れや木材を使った制作も、接着がボンドであったり、釘の使用は限られているように思われる。日常生活や保育・教育施設で釘にふれる機会が少なくなっている状況からは、釘の扱いに慣れている保育者は多くないことが予測できる。

3. 実践の概要

実施にあてた時期のK幼稚園の幼児たちは、作品展を終えたばかりで、その約1か月間、作品展に向けての、つくったりかいたりする活動をたっぷり楽しんできていた。作品展に向けての活動を通して、友だち同士で活動について話し合ったり、物事を決めたりする姿が見られるようになってきたと、各クラスの保育者が話していた。木材や釘を使った活動の経験に関しては、蒲鉾板を釘で打って接合したことがある幼児もいるが、大半の幼児にとっては初めての活動である。また、木材や釘を使った活動の指導経験がある保育者は、3名中1名であった。

- 1) テーマ：釘で何ができるかな？
- 2) ねらい：釘を身近にあるいろいろな「刺せる」材料と組み合わせて工夫してつくることを楽しむ。
- 3) 対象：年長児72名（実践1/24名）、（実践2/25名）、（実践3/23名）
- 4) 日時：11月22日（実践1）、11月26日（実践2）
12月3日（実践3）
各日 10時30分～11時30分
- 5) 場所：K幼稚園多目的室
- 6) 材料用具：カラー釘セット、杉板、スチロール材（板状、トレイ、梱包用等）、スポンジ（いろいろな種類）、釘打ち補助具（ネイルガイド）、ハンマー、ラジオペンチ、釘抜き、釘入れ容器

7) 活動の流れ

- ①釘について知っていること等を話す。
- ②気に入った材料を選ぶ。
- ③釘の色を選び、材料に模様や絵になるよう並べて刺したり、釘で材料と材料を組み合わせでイメージしたものをつくったり、杉板に打ち込んだりする。
- ④皆で片付ける。

8) 留意点

- 釘は、いろいろな色があり、細くて先が尖った「刺す」ことができる材料として、幼児に紹介する。杉板に刺した後、ハンマーで打つ実演をして見せる。
- 幼児が、やってみたいことや、やれそうなことを選ぶよう、保育室に3種類の材料コーナー（杉板、スチロール材、スポンジ）を設ける。
- 杉板コーナーには、ハンマー、釘打ち補助具（ネイルガイド）、ラジオペンチを準備する（写真2、3）。
- 部屋のドアを開放し、ハンマーで打つ音がこもらないようにする。
- 活動前に話し合い、釘は使う分だけを自分の釘入れ容器に取って使うこと、釘が床に落ちたらすぐ拾って元の容器に入れることを約束する。
- 活動に満足したら、別のコーナーに移動してもかまわないことを伝える。



写真2,3 杉板コーナー 実践1は床で実践2、3は机で

4. 各材料コーナーの活動の様子

4-1. 杉板コーナー

幼児たちに、どの材料のコーナーで活動したいか聞いたところ、実践1、2、3とも、人気があったのは杉板のコーナーであった。ハンマーの数が限られていたので、先に杉板から始めるグループと後からのグループに分けた。途中交代するよう声掛けをしたが、最後まで杉板での活動に集中していた幼児もいれば、他の材料でつくることに満足して杉板での活動を経験しなかった幼児もいた。

柔らかい杉板だったので、幼児でも指でつまんだ釘を材に刺すことができた。ほとんどの幼児は、釘を指で支えたままハンマーで打っていたが、釘が倒れて戸惑う幼児に、刺した釘を釘打ち補助具（ネイルガイド）やラジオペンチで支える方法を伝え、真似して使う幼児もいた。力加減やタイミングがなかなかつかめない幼児もいたが、ハンマー等の扱い方をいろいろ試し、だんだんコツを掴んでいく幼児もいた。友だち同士で教え合ったり、場所を譲り合ったりする姿も見られた。普段の造形活動にはすぐ飽きてしまう A 児は、始まりから最後まで杉板コーナーで、釘を刺して打つ活動に集中していた。ラジオペンチで釘を支えて打つと、杉板からの高さが揃うことに気づき、高さや幅を揃えながら、釘が一行になるよう刺してはハンマーで打っていた（写真 1）。「背の順に並んでいるみたい」と高さにこだわった発言も聞かれた。打った釘が斜めになってしまう B 児は、釘が倒れる方向がバラバラな様子を「（釘が）おにごっこをしているみたい」と話していた（写真 4）。ハンマーでの釘打ちを続けた B 児は、後半には真っすぐに打てるようになっていた。

釘を杉板に刺せない幼児には、窪みが作れるネイルガイドのキリ部分を使ってみることを提案したり、ハンマーのコントロールが上手くできない幼児には、手を添えて釘の頭をめがけてハンマーを振る感覚を伝えたりした。



写真 4 おにごっこをしている釘たち

4-2. スチロール材コーナー

幼児が指で釘を差し込める硬さのカップや食品トレイ、電気製品の形状に合わせた不定形な梱包材、板状のもの等、身近にあるスチロール材を集め、コーナーの机に各種類並べた。釘の色が活かせるように、色は白に統一した。

幼児は、スチロール材の形を選び、とにかく刺してみるから活動を始めた。

カップ状のものはやや硬く、曲面になっているので扱いにくい様子も見られたが、手の平サイズの立体からイ



写真 5 リボンの女の子



写真 6 足のある生き物

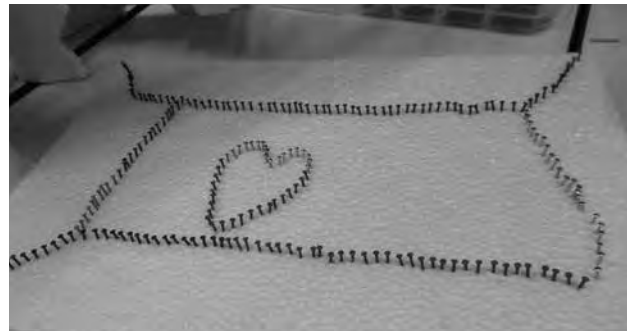


写真 7 ハートができた

メージが広がったのか、生き物に見立ててつくる幼児が数人いた。目は黒、リボンは赤、頬にはピンク等とカラー釘の色を選び、大きさや刺す位置を考えながら刺していた（写真 5）。C 児はカップの底に釘を刺し、釘を生き物の足にしようとした。刺した穴が大きくなると、釘が止まってほしい位置に止まらないことに気づき、場所を変えては慎重に刺しながら、何度も高さを調整していた（写真 6）。

板状のスチロール材を選んだ D 児は、21 色のカラー釘が入ったケースから、同じ色を自分の釘入れ容器に集め、高さや幅が同じになるよう気にしながら、線状に並べて刺した。容器に釘がなくなると、違う色の釘を集めて入れ、続きをした。満足すると、「ハートができた」と話していた（写真 7）。

いろいろなスチロール材を吟味していた E 児は、板状やトレー状の材料を組み合わせ、家をつくることを思いついた。釘は、材料と材料を繋げるために使用した。



写真 8 材料同士を刺して繋げる

材料同士を釘で接合できる場所を見つけ、片手で材を支えながら家の壁や屋根をつくった。部屋の中には、釘で模様を描いた(写真8)。

4-3. スポンジコーナー

用途によって様々な形、色をした市販のスポンジを容器に入れて机に置いた。繊維の絡み具合で釘が刺しにくいスポンジは省いた。また、直方体の食器用スポンジを、筆者が丸みのある形にハサミで成形したものも用意した。

コーナーに来た幼児たちは、スポンジの感触を確かめたり、スポンジの形や釘の色を選んだり、スポンジに釘を刺して、刺さり具合を確かめていた(写真9)。細く長い平らな部分がある釘の形やいろいろな色を工夫してスポンジに刺し、スポンジの形や色からイメージしたものや、釘を刺しているうちに思いついたものをつくり進めた。また、釘を、スポンジ同士を繋げるために刺して使う幼児もいた。顔や手足のある生き物、角があるアニメのキャラクター、電車などの乗り物ができていた。つくったものを動かしたり、おしゃべりさせたりして、友だち同士で遊ぶ様子も見られた(写真10)。



写真9 スポンジの形や釘の色を選ぶ幼児たち



写真10 スポンジの人形で、友だちとごっこ遊び

5. まとめ

3クラスの実践で、幼児は、釘を杉板、スチロール材、スポンジ等の材料に「刺す」ことからはじめ、ハンマーで打つ、並べてハンマーで打つ、ハンマーで打ち込む、

材料に刺し込む、高さや幅を考えて並べる、色を揃えて並べる、材料同士を繋げる、見立てる等の活動を展開した。釘は、釘を刺すことができる他の材料と組み合わせれば、幼児の多様な表現を引き出す材料になると言える。

実践後の保育者へのアンケートには、「(釘の活動は、)手を打ったり、刺したりして危険なイメージだったが、ルールを守り、大きな怪我無く使える(材料だ)と感じた。」「もっとどうしたらいいか悩んだり、戸惑ったりするかと思ったが、子どもたちの自由な発想がたくさん出た、楽しい活動になることが分かった。」等、釘の活動に対する意識変化がみられた。また、今後幼児と一緒に取り組みたい活動として「大きな木材を使って大きな作品を作ってみたい。」「おまごなどに使えるイスをつくる。」「本当の大工さんみたいにできれば面白いと思った。」等の意見からは、釘の活動を機会があれば保育に取り入れたいという意欲がうかがえる。さらに、「保育室で(子どもの)釘打ちの話をする姿が見られ、接着方法の中の一つとして工夫したい、形を作る時に釘を使いたいとの話も出るようになった。」という意見があり、実践後も釘に対しての興味や関心をもち続けた幼児もいることが分かった。

本実践からは、幼児の様々な行為を引き出すカラー釘の可能性が示唆された。また、1本1本真剣に材料に釘を刺す幼児の姿から、「釘を打つ行為」に繋がるであろう「釘を刺す行為」も、幼児の世界とのコミュニケーションであるように思われた。

6. 今後の課題

木育として、保育の場で木工を実践する研究も見られる。今後さらに、幼児の釘にふれる機会や釘を使った造形活動のための教材研究や指導援助についての研究を行い、釘が幼児の身近な材料の1つとして扱われるよう検討していきたい。

謝辞

実践に参加したK幼稚園の幼児の皆さん、ご協力いただいた保育者の皆様に感謝いたします。なお、本稿に掲載した写真は、園長及び、保護者の方から書面で掲載許可をいただいたものです。

参考文献

- ・仁木裕美(2023)「釘を打つ行為にみる精神性についての一考察」『大学造形美術教育研究』第22号



シルクスクリーン印刷によるサコッシュ作り体験教室の記録

大阪人間科学大学 仁木裕美

1. はじめに

大阪府摂津市では毎年10月に市内の子どもたちの作品を一堂に集めた「せつつしこども展覧会」が開催されており、展示期間中には子どもたちを対象にした無料の工作体験教室が行われている。この工作体験教室の運営を筆者のゼミの学生らが中心となり2022年度から毎年請け負っており、シルクスクリーン印刷によるサコッシュ作りを続けている。3年目となる2024年度は活動できる最後の年になるため、活動記録として記しておきたい。

2. 実施概要

対象：小学生以下の子ども（参加無料・予約不要）

日時：2022年10月22日（土）、2023年10月21日（土）、2024年10月12日（土）

場所：摂津市立コミュニティプラザ

参加者実績：2022年（約52組）、2023年（約80組）、2024年（約80組）

活動学生数：2022年（7名）、2023年（9名）、2024年（10名）

その他：活動に必要な制作費は摂津市の予算により賄われている。

3. シルクスクリーン印刷について

シルクスクリーンは孔版印刷の一種で、メッシュ状の版に孔（あな）を作り、孔の部分にだけインクを落

として印刷する方法である。シルクスクリーンで印刷された身近なものとして、Tシャツ、トートバッグ、生地などの布製品の他、電子基板などにも使われている。版にあたるスクリーンの素材には当初シルク(絹)が使われていたが、現在ではポリエステルやナイロンなどの化学繊維が主流となっている。版画の孔版技法として専門性が高い部類に入るため、保育現場や小学校ではなかなか経験することはない。しかし、簡易版の制作キット「Tシャツくん®」を活用することで学生がデザインした図案を製版し、サコッシュへの印刷まで手軽に行うことができた。

4. 本活動の意義

版遊びは、版作りから写しとる活動に至るまでに様々な工程があるが、どの工程もおもしろく子どもたちの興味は尽きない。幼児期の版遊びの特質の1つとして「予想外の形が写し出される不思議さや驚き」が挙げられ、ズレやにじみさえ味わいになることもある。一方で、本活動では、初めてシルクスクリーン印刷を体験する子どもたちが失敗なく印刷し、自由に絵を描き足すことでオリジナルのサコッシュ作りに満足できるようサポートをする必要がある。そのため、学生たちはある程度できあがりの予想をし、年齢にあわせた声かけをしながら援助するスキルも身につけておく必要があった。学外活動は、社会との接点を意識した学びの場であり、保育者・教育者を志す学生たちが大きな成長を遂げる場でもある。

5. 活動の過程

(1) 事前準備

活動日までにゼミ学生を中心に製版と印刷の工程まで行い、シルクスクリーン印刷の特製を掴んでおく必要がある。以下にそのプロセスを記す。

①原稿を作る

例年、学生がデザインしたイラスト2種類を使って制作している。2023年は摂津市の名産「鳥飼なす」をモチーフに、もう一つは10月という季節をイメージしてハロウィン仕様にした〈写真1〉。イラストの線は細すぎると孔からインクがうまく落ちず、きれいに印刷することができないことがある。そのため、タブレットのイラストアプリを使用することで、問題になりやすい線の太さを修正しやすいようにした。また、イラストの一部にベタ面を作ると全体のバランスがよくなり、色の効果が表れるように留意した。

②版を作る

本学の美術室を暗室に近い状態にし、赤色灯を使用して製版作業を行った。筆者が本活動において1番魅力的に感じているのは、この暗室での製版の工程にある。暗闇は時に学生たちの眠気を誘い、時に時間を忘れるほど集中力を高める。特に、製版した版をやさしく水洗いしているとうっすらと線が浮き上がってくる瞬間がある〈写真2〉。その瞬間「わあ!」と思わず声をもらし心を踊らせる学生の姿を目の当たりにできることは、教員としても嬉しい瞬間であった。

③サコッシュへの印刷

サコッシュとインクの色のお組み合わせを考え、インクを載せてスキージで擦る。版を持ち上げると完成する。繰り返し印刷に挑戦し、イラストに応じたインクの適正量を掴んでおくこと、子どもたちが同様の作業をする際に適した援助をイメージしておくよう注意を促した〈写真3〉。

④片付け

2種類の版をそれぞれ3枚ずつ用意し、当日はそれを使い回すことになる。シルクスクリーンの版にインクが付いたままになっていると孔が塞がり印刷することができなくなる。そのため、刷り終えた版に残っ



写真1(左) 2023年のデザイン(制作/中野素生)

写真2(右) 暗室で行う製版作業はワクワクする

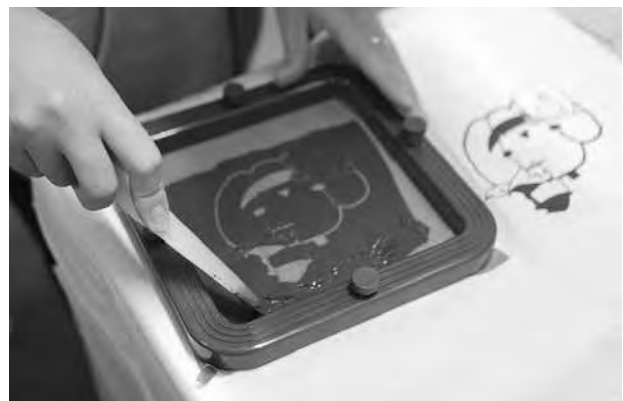


写真3 事前に何度も刷る練習をしてコツを掴む



写真4 サコッシュを手に当日に向けて意気込む学生たち

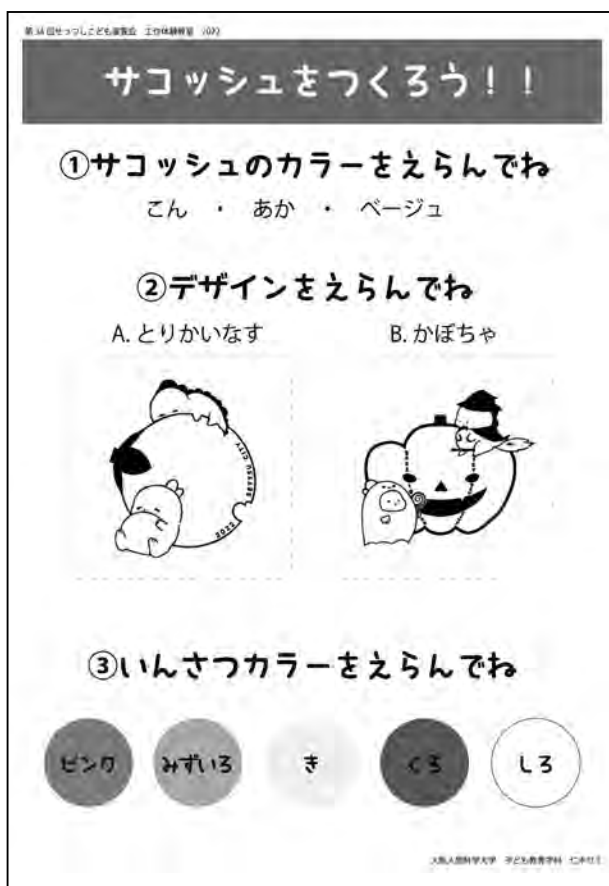


写真5 サコッシュを作ろうシート



写真6 どのデザインにする?どっちもいいね!

たインクを速やかに洗い流し、乾燥させ次の出番に備える必要があった。学生たちはこうしてシルクスクリーンの特性を学びながら、当日の役割分担を決めていった〈写真4〉。

(2) 当日の活動の流れ

①色選び

来場した子どもたちが〈写真5〉のシートを参考に版のデザイン、サコッシュの色、インクの色を決める。組み合わせのパターンは30種類に及ぶことになる。学生たちは自分たちで制作済みのサコッシュを見せながら優しく語りかけ、色を決めきれない子どもたちの相談にのっていた〈写真6〉。

②印刷

選んだ色を版にのせ、スキージで上からこする。子どもが自分でできそうであれば見守り、難しそうであれば一緒に行くなど、子どもの年齢に応じて、一人ひとりに向き合う学生の姿がみられた〈写真7〉。

③乾燥

インク汚れや擦れを防止するために、ドライヤーで大まかに乾かす〈写真8〉。



写真7 年齢に合わせて一人ひとり丁寧にサポート



写真8 ドライヤーを使って乾かす子どもを見守る

④落書き

布用カラーペンでサコッシュに自由に絵を描く。塗りつぶしたり、模様や絵を描き足したりしながら、どんどんと唯一無二の自分だけのサコッシュになっていく。子どもたちの発想はユニークかつ自由で、圧倒的なエネルギーがあった。最初は緊張していた学生たちも傍で見守る保護者の方々と少しずつ会話できるようになり、より笑顔が見られるようになった〈写真 9〉〈写真 10〉。

⑤完成

子どもたちは、世界に一つだけのサコッシュを肩から掛けて「どこに遊びに行こうかな?」「何を入れようかな?」と学生との会話を楽しんでいた〈写真 11〉。

⑥裏方の仕事

子どもたちに直接対応する表舞台の役割のみならず、裏方の仕事は円滑な運営を支える重要な役割を果たす。常に全体を見渡しながらか、使い終えた版をすぐさま水洗いし、乾燥させ、次の利用に備える裏方の仕事に徹する学生の姿もあり、頼もしく感じた〈写真 12〉〈写真 13〉。



写真 9 (左) 最後の自由なお絵描きが止まらない
写真 10 (右) 子どもたちの個性あふれるサコッシュに進化



写真 11 大満足のサコッシュができたよ!ピース!

6. さいごに

毎年、数多くの子どもたちや親子に來場いただき、オリジナルのサコッシュ作りは人気を博したと自負している。順番待ちで会場の外に並ぶ子どもたちの列に慌てながらも歓喜し、一人ひとりに笑顔で丁寧に対応する学生たちの姿に個々の成長を感じることができた。地域の方々に成長させていただいていることを実感する瞬間でもある。学外での実践的な活動の際には、学生が普段見せない意外な一面を発見することも嬉しい。2022 年度には J:COM チャンネルの取材も入り、学生たちにとって大きな励みとなった。イラストを担当した学生にとっては、自分のデザインを通して社会との接点を持てたこと、子どもたちの笑顔を引き出したことに、一層の誇りと自信を持つことになったと思う。また、一度経験した学生は次年度にも参加し、後輩の指導をすることに繋がり、学年を越えた繋がりも生まれた〈写真 14〉

総じて、3年間という短い取り組みであったが、学外活動を通じた経験が学生たちの今後の学びや成長にもつながる重要な糧となったと考える。最後に、社会に出ていく彼らに心からエールを送りたい。



写真 12 (左) 版を洗い続ける裏方がいてこそ運営が成り立つ
写真 13 (右) 洗い終えた版を受け取り次々に乾かす



写真 14 活動後の集合写真 2024



地域と連携した子どもの絵具あそびの実践

名古屋柳城女子大学 林韓燮

1. はじめに

本稿は、名古屋柳城女子大学の「保育内容指導法（表現）」の授業において、筆者が担当する造形領域の地域連携型授業についてまとめた実践報告である。地域連携型授業とは、地域の子どもにあそびを提供し、かかわる活動をとおして実践力を高めることをねらいとしたものである。実施場所は、毎年開催する大学祭であり、地域の子育て家庭を対象に実施した。また、保育学生が子どもとかかわるという実体験をすることは、授業で学んだ専門知識や実技スキルを生かしてあそび指導を行うことで指導法を身につけられるという効果につながると考える。なお、地域の子育て家庭を対象にするため、コミュニティとの関係を築くことができることから、互いの

理解が高まることが期待できると考えられる。本稿では、この地域連携型授業の実践活動の概要、実施の様子、学生の振り返るについて報告する。

2. 地域連携型授業のねらい

これまでの授業では実践活動を想定し、学習効果、事例の紹介、実践実技の体験の順で行った。

保育学生は授業で得られた専門知識と実技スキルを、実習やボランティア活動などの様々なシーンで発揮し、学びを深められるよう取り組んできた。そのため、これまでの授業において、十分な学習効果があるに違いない。

しかし、子どもの行動や興味関心など、子どもとかかわることでしか得られない、体験的学びが必要であり、

その学びの機会は、地域の子育て家庭への貢献にもつながるため、非常に重要であるといえる。そこで、地域連携型授業では、次のようなねらいを設定した。

- ・実践活動の計画や準備段階において工夫を重ねる。
- ・地域の子育て家庭とかかわることで、保育者に求められる実践力を高める。
- ・子どもの姿から実践内容を振り返り、保育内容指導法を明確にする。

以上のねらいのもと、地域の子育て家庭と連携して多くの方が見守る中で、学生の主体性が育まれる実践活動を行った。

3.「表現」と「絵具あそび」の概要と構成

2年次の「保育内容指導法（表現）」は、3人の教員（身体・音楽・造形）が15回の授業のうち、5回ずつを担当している（表1）。なかでも造形領域においては、「子どもの絵具あそび」をテーマに実践活動を行うこととし、計画・準備・実践という流れで授業を計画した。

①概要

絵具あそびは2部制にし、参加者の安全確保のため、各回の子どもの参加人数は、15名を基準とし、学生スタッフ

フ数も15名と設定した。保護者は10組を想定し、最大50名を超えないようにした。絵具あそびの実施概要は次の通りである。

表1. 授業（造形）の内容

授業回	内容（造形）
第1回	ガイダンス・身体感覚を高める活動
第2回	新聞紙を用いたあそび
第3回	子どものあそび計画：絵具を用いて
第4回	子どものあそび準備：役割とかかわり
第5回	子どものあそび実践：かかわること

【日時】2024年10月12日（土）12:00～16:00

- ・受付：12時より先着順
- ・会場準備：～13時
- ・1部：13時～13時40分
- ・片付けと準備：13時40分～14時
- ・2部：14時～14時40分
- ・片付け：2部終了時から順次

【場所】名古屋柳城女子大学・名古屋柳城短期大学中庭

【対象】地域の子育て家庭

前日の準備は第4回の授業で行い、準備内容は、役



図1. 実施要領 (p.1)



図2. 実施要領 (p.2)

割一覧から希望する役割を選ぶ方法で担当者を決め、絵具あそびに必要な物品、会場の装飾、看板づくりなどの担当に分かれ、準備を進めた。また、当日の役割が決まってから、各担当者と全体の配置を検討したうえで、全体流れの確認と調整をした。最終実施要領は図1、2に示す。当日の役割は、受付、会場準備、1部の実践担当、2部の実践担当、片付けの5つに分かれて担当した。

なお、学生は担当する時間が決まっているものの、絵具あそびの実践全般を見守ることを前提とし、必要に応じて手助けをすることにした。

② 構成

絵具あそびは「色水あそび」と「ゆび絵具あそび」の2種類で構成した。色水あそびは、2歳未満でも楽しめるように工夫した。また、色水あそびのレクチャーは第3回目の授業で実施し、絵具を用いた色水づくりと環境設定、そしてあそびの展開について学習した。

ゆび絵具あそびは2歳以上の子どもに手形スタンプやフィンガーペインティングを楽しめるように設定した。また「株式会社ぺんてる」「中部紙業株式会社(名古屋市守山区)」の物品提供を依頼し、提供されたゆび絵具と板段ボールを用いて準備および実践活動を行った。

4. 実践活動の展開

① 直前準備

実践活動の直前の準備風景は図3である。絵具が芝につかないようにビニールで養生したうえ、環境設定を行った。

図3の左手前が色水あそびコーナー、中央に板段ボールを屏風のようにジャバラの形状にし、地面に固定しなくても段ボール壁が転倒しないように工夫した。また、右中央にゆび絵具のワゴンとその近くに受付を配置した。中央下は手を洗うための水を用意し、必要な場合に手を洗ったり、絵具を洗い落とすことができるようにした。

② 受付

受付は当日12時より開始し、1部と2部の受付を同時に行った。各回の参加者を区別するために、1部の参加者には黄色のバンドを、2部の参加者には赤色のバンドを渡し、参加時間には腕につけて入場するよう説明した。また、参加に関する同意書と名簿を記入し、注意事項や活動についての説明をした後、カラービニールでつくった子ども用のポンチョを渡した。図4は活動開始前の受付の様子である。

受付では、参加希望者が予想より上回るようになった



図3. 環境設定(10月12日)



図4. 受付の様子



図5. 実践風景(1部の全体)



図6. 実践風景(2部の個別)

ため、安全確保ができる範囲で参加人数を調整した。

③実践活動

参加人数を調整したことで、1部の参加子どもは20名、2部の参加子どもは18名となった。受付の際に、1組複数の子どもの参加もあり、できる限り多くの子どもが参加できるように工夫した結果である。図5は1部活動の開始直後の様子である。

多くの子どもたちが好きな場所で好きな色を手にとって手や指を道具に見立て、夢中になってあそぶ姿が見られた。普段の絵具あそびでは、服や手足に絵具が付くことを心配していた保護者も、この日には、子どもの姿を見守り、楽しくあそび子どもの気持ちを理解しようと努力を惜しまなかったかもしれない(図6)。

学生は、子どもや保護者が安全かつ楽しくあそびに参加できるよう、必要に応じて声掛けをしたり、絵具や筆など使いたいものが手元にない子どもに絵具コーナーまで案内したりするなど、子どもと積極的にコミュニケーションを取りながらかわった(図7)。

④振り返り

実践活動後、振り返りを行った。振り返り方法は、大学のLMS(Learning Management System)であるWebclassを使い、役割ごとに担当学生が意見を記入することとした。その回答をまとめると次の通りである。

まず、準備担当学生からは、子どもたちが自ら楽しむ姿を見て、子どもたちとかかる機会を持ちたくなったという意見があり、事前の準備や協力の重要性、子どもたちの自由なあそびを支える環境設定の大切さを学んだという記述が多くみられた。次に受付担当学生からは、実践活動を通して子どもや保護者とかかわりを深めたことや、子ども同士があそびながら仲良くなる様子を観察して学ぶことが多くあり、その姿から事前準備や受付を頑張ったことに満足することができたという意見があった。一方で、工夫したいことは、受付前の誘導や人数制限など、



図7. 実践風景(子どもとかかわり)

準備の段階でイメージしておきたい、1部と2部の列が他の参加列との見分けが難しかったため、誘導しやすくしたいという意見も確認された。また、実践担当学生からは、はじめは筆を使っていた子どもたちも手を使うことに挑戦し、色を混ぜる楽しいあそびになったこと、保護者は子どもが夢中になってあそび姿を見守っていたこと、さらには、保護者も子どもと一緒に絵具あそびを楽しめる貴重な時間ではないかという意見があった。

最後に片付け担当学生からは、片付けの際に、子どもたちが自分で使った道具を洗ったり、協力して片付けをしたりする姿が印象的であったこと、保護者や先生、卒業生の笑顔も見られ、心が温かくなったという意見があった。

5. まとめ

今回の実践活動は、授業の一環で地域の子どもとあそびを通してかかわるという地域連携型授業の試みであった。学生にとっては主体的に実践して学ぶ機会となったこと、参加した子どもや保護者にとっては思う存分に楽しむことができたことから、学生と子育て家庭の両者が互恵関係を築くことができたのではないかと考えられる。

また、学生の姿からは、準備や受付の際に、柔軟に対応することができたことや、参加子ども同士の交流を確かめることができたことなど、学生の立場においても高い教育的効果が得られたと考えられる。さらに、計画、準備そして実践活動、後片付けまでのプロセスは長かったかもしれないが、保育学生として、仲間と協力して取り組むことができ、協調性を深める機会にもなった。

以上のことから、今回の試みは、保育者養成の側面からも地域貢献の側面からも価値の高い活動であるといえる。今後も継続的に学生が地域の子どもとかかわる機会を設けることによって、保育への意欲が高まり、より優れた実践力を備えた保育者養成につながると考えられる。

【註】

活動の様子は、写真掲載することに対し、参加者および該当学生の承諾を得た。

【謝辞】

「株式会社ぺんてる」と「中部紙業株式会社」の商品提供により、地域の子育て家庭に楽しいあそびの場を提供することができました。心より感謝申し上げます。

あえて盛大にワークショップを行わない立案 —ふうカメは木を観て森も観る—

新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科 福岡龍太

はじめに

人の交流が極端に制限された社会から解放された2024年度、人が集う施設などからワークショップの開催依頼が相次ぐ。2020年以前のワークショップの活動内容を取り戻そうと、様々な企画の立案が期待される中、本学の学外造形サークル活動は「親子の居場所サークル」という主題で極めてシンプルな内容を提案し、そしてそれをひたすら継続することに専念した。閉塞感に満ちた3年間の鬱憤を晴らすための大きな花火を打ち上げたい気持ちをぐっところえて、地道な活動を心がけた学生の努力は、これからの表現教育に保育者養成校としてひとつのきっかけを投じることができるだろうか。

Ⅰ 現況と問題意識

1. 学生の本音

毎年、入学したばかりの本学幼児教育学科の学生から「図画工作が苦手」という声をかなりの割合で聞く。そして、その意識を改善したいと授業に臨む。2020年から3年余り続いた社会の流れの停滞がようやく解消され、2023年後半から平常を取り戻した生活を実感できる学生は多い。そして社会が停滞していた時に授業とは別にやりたかった、他者と関わる経験、学外活動等のワークショップを望む声は、それ以前の苦手意識を払しょくしたいために実践したいという動機とは明らかに違う。今在籍している学生は、「子どもと遊びたい」という欲しかなく、子どもを中心としたコミュニケーション構築を図るワークショップへの期待が、日を追うごとに増しているようだ。

2. 学生の欲望

厳しい制約が過去の思い出となりつつある今年度、子どもが集う公共施設や私立園、放課後等デ

イサービス事業所などからの「すべてお任せするので、造形活動を開催してください」といった、とにかく今すぐ何かやってほしいという依頼が急増した。枯渇した「人と人の交流」を復活させたいという逼迫した状況が学生同様に垣間見える。実は、この声を予測したかのように2023年11月、当時本学短大幼児教育学科2年生であった有志学生が、学外造形活動を実践するサークルを立ち上げた。近い将来に依頼があった時、即座に対応できる組織を目指した。設立から一年が経過した現在、活動依頼と実績は順調に増加している。本研究ノートでは、一年間の活動内容を振り返ってみる。

3. 学生の不満

2020年春より始まった危機的な社会情勢は、それまで経験したことがない社会生活を余儀なくされる状況をもたらした。特に教育機関での変化は著しく、本学科においても手探りで遠隔授業を実施する教員が各々課題を与えた結果、知らず知らずのうちに学生へ膨大な負担を強いていた。日に日に疲弊していく姿をモニター越しに見る筆者は、解決の見えない現況に不安しか感じなかった。

短い学生生活とはいえ、造形活動を短大の図画工作という授業内に留めることなく、社会へ学生の表現力を発信したいと強く望む筆者は、本来ならば積極的に社会との交流を進めるのだが、全く打つ手は見当たらなかった。そのかわりに、遠隔授業を通じて何とか元気を取り戻してくれるためのアイデアがないかと策を講じる毎日が続いた。

4. 学生の意欲

そんな生活も3年目となる2022年度を迎えると、授業が全面対面で行われることが多くなり、学生からは学外活動を実践したいという要望が高まっていた。そして2023年11月に有志10名ほどで、

サークル設立を実現した。

サークルを立ち上げる以前からワークショップを行いたいという相談は教育機関からちらほらいただいていたのだが、正式に学生主体で活動ができるようになると、活動内容は学生にお任せするので今すぐにでも実施してほしいとの声に急変した。そして、人と人とが対面で関わる極めてアナログで単純な表現活動に、豊かな社会を構築するきっかけが潜んでいることを察した学生は、「これからの親子がデジタル社会を生きるために必要なオアシスを作りたい」との強い意向を掲げることにした。

Ⅱ．「親子の居場所サークル ふうちゃん mo カメレオン」

1. サークル名称の誕生経緯

サークルを立ち上げた日からさかのぼること数ヵ月前の夏、閉塞感に満ちた社会から子どもを脱出させようと、NPO 団体からの依頼による大型公共公園での子どもと遊ぶワークショップを学生主体で企画をしていた。活動内容を検討している時、ある学生が「カメレオン」とだけ発言をした。公園にカメレオンを放ち、触れ合いたいと言いたかったのだろう。その場にいた学生は、その唐突なワークショップを実現しようと議論が一気に白熱した。しかし、カメレオンの生体を確保することや会期中のカメレオンの健康

管理を考えると、問題が多すぎる事が判明したため、カメレオンから想像されるイメージを活動理念に盛り込むことに意識を転化していった。そして数日の議論を経て、「集まった親子



写真1 中里なかよし保育園での活動風景

が安心して能動的に表現活動を楽しむことができる場を参加者全員で作りながら、そこに携わる学生は各々その場の雰囲気にならなように姿かたちや色までも変える、まるでカメレオンのように関わろう」という結論に達した。そして「カメレオン」と発言した学生の名を冠した「ふうちゃん mo カメレオン」（以下ふうカメ）というサークルが誕生したのである。

2. 2023、2024 年度のふうカメ活動内容と登録状況

活動タイトルは様々だが、活動内容は 1m × 10m の厚口ロール紙を床に敷いてマジックペン等の着色用具でラクガキをする。描く内容などの指定はせず、描きたいときに描きたいものを描く環境を整えておく。スタッフの学生は来場者に過度な声掛



写真2 こども創造センターでの活動風景



写真3 福祉・介護・健康フェア in 新潟の活動風景



写真4 ミナト・イン・ワンダーランドの風景

けはせずに、すでにラクガキをしている。

2023年11月以降のふうカメへの依頼内容を以下に記すが、学外活動のみに限定する。また、依頼があったものの天候不順や主催者の都合等により中止となったものは除外する。(2024年12月31日執筆現在)

2023年度

2024年2月

- ・中里なかよし保育園「ハイザイ☆パラダイス」十日町市

3月

- ・道の駅あがのキッズルーム「新聞紙とたわむれる」阿賀野市
- ・九段幼稚園「ハイザイ☆パラダイス」東京都千代田区

2024年度

- ・中里なかよし保育園「ハイザイ☆パラダイス」毎月第2木曜開催
- ・新潟市子ども創造センター「ラクガキしよ〜かな☆ビックリしよ〜かな」7月より毎月1回開催

2024年7月

- ・九段幼稚園「ハイザイ☆パラダイス」東京都千

代田区

- ・聖心こども園「ハイザイ☆パラダイス」胎内市
- ・九段幼稚園「ハイザイ☆パラダイス」東京都千代田区

- ・むつみこども園「ハイザイ☆パラダイス」十日町市

11月

- ・福祉・介護・健康フェア in 新潟「絵画のワークショップ」新潟市産業振興センター

12月

- ・道の駅あがのキッズルーム「はらぺこワークショップ」阿賀野市
- ・ミナト・イン・ワンダーランド 2024「お絵描きワークショップ」万代島多目的広場おおかま

現在のふうカメ登録者数は105名(うち卒業生21名)。創立メンバーから現サークル長への引き継ぎは2024年3月に行われたが、サークル長の決定は前サークル長の判断に委ね、筆者を含めた顧問教員5名は関与しなかった。

Ⅲ. 考察

1. 内発的動機を確立する

学外活動へ参加する学生は、自身の将来を見越してそこに価値を見出し、積極的に参加を検討しているようだ。しかし、現在のふうカメ登録者数は現役学生だけで100名近くを数えるが、実際に活動する学生は固定化され、それほど多くはない。なぜならば、短大という特性上なのか1年生は1限から5限までの平日授業は埋まり、参加するのであれば週末しか選択肢がない。また2年生になれば授業が少なくなるかと思いきや、半日自由になることすら少なく、集中して活動できる日は1年生の時とさほど変わらないからだ。

学ぶことへの動機は外発的と内発的とに分けられるようで、外発的動機とは例えば、努力をすればいいことがあるから勉強しようと思うこと。内発的動機とは、純粋に勉強が楽しいから勉強するということなのだという。報酬など要らないから子どもに関わりたくて願う内発的動機に満ち溢れた学生が、思う存分活動できる時間が得られないということは、閉塞感と無力感を強いられたあの時期の再来かと錯覚をさせてしまうかもしれない。遊びと学びを同等に位置づける学生の極めて純粋な意思表現意欲を潰さないようにするために、教員は何をするべきなのだろうか。

2. 1年間のふうカメを振り返って

ふうカメの活動のほとんどは、参加希望学生が活動内容を決め、依頼者へプレゼンテーションを行い、役割分担を決めて活動を実施する。その後、実施した学生がSNSで写真の公開と報告を行い、依頼者との情報共有で活動を締めくくる。学びと遊びを同等に位置づけながら、ふうカメの活動理念を理解しようとする学生は、内発的動機を原動力としている。この内的な衝動が依頼者へ伝わることで、それが意欲と見なされる。そして、子どもと関わるチャンスはさらに広がっていった。もし学生が真剣に遊んでいなければ、一緒に遊ぼうと近寄ってくれた子どもの遊びは“台無し”になっていただろう。造形活動を主とするワークショップを「○○を作ろう」と意気込んでしまえば、はたして自身が楽しむことを継続して行うことができただろうか。少なくとも、ふうカメの活動に参加した学生はその活動を楽しんでいたようで、子どもを遊びに魅了していたと言える。

3. 今後の「ふうカメ」

「主体的な表現を引き出す」と呪文のように唱え、重んじる昨今の教育環境で、実際にどうすればいいのかを検討するのであれば、イベント内容を大きくするのではなく、地道に継続できる誰でも参加しやすいシンプルな活動にしてみてもどうだろうか。今後、ふうカメの運営は外部からの活動依頼にできる限り応えていくために、授業との折り合いを検討する必要がある。フレキシブルな授業形態は、学生が時代の流れを敏感に察知しながら実践力の獲得が期待できるからだ。ひょっとするとカリキュラムの見直しまでもが必要と判断され、即座に改善が実行できれば、今以上に気軽な参加を学生に促すことができるかもしれない。そして、その集合体が内発的動機で満たされる元気なワークショップとなるであろう。

おわりに

子どもの能動的な造形表現意欲を引き出し、豊かな森を形成しようとするならば、木となる学生が実践経験を重ね、経験知という引き出しを増やすことは望ましい。そして、その営みを止めることなく後輩や、もっと大きな視野で言うならば次の世代との協働により、木を増やし、それぞれの木の成長は目まぐるしく、その結果大きくて強靱な森が形成されていくことだろう。おそらく子どもは、この森を遠くからよく観察し、一本一本の木もしっかり観察し、その中に思い切り飛び込んでいくことだろう。

参考文献

- ・岩田健太郎『主体性は教えられるか』筑摩選書 2012
- ・大豆生田啓友、大豆生田千夏『非認知能力を育てる 遊びのレシピー 0歳～5歳児のあとのびする力を高める』講談社 2019・岡田猛、縣拓充「芸術表現を促すということ：アート・ワークショップによる創造的教養人の育成の試み」『Keio SFC journal』慶応技術大学湘南藤沢学会 12.2 2012
- ・中田基昭『子どもから学ぶ教育学—乳幼児の豊かな感受性をめぐる—』東京大学出版会 2013

「造形制作実施時の留意点の再確認」～教育現場での造形教室実践を踏まえて

東京未来大学 通信課程 森高光広

1. はじめに

大学等で幼・保専攻等の学生に対して、造形に関する授業を継続して複数担当してきた。小・中学校で教員経験があり、大学の教員となってからも自ら現場で実践しつつ学生に指導をしてきた。授業で学生には様々な制作や演習を通して、柔軟に子どもの制作に関われるように意識づけてきている。実習の場や実際に教育現場で働く際に、学生が学んだことが十分に活用されるかは以前から気にしていた。2023年度から、複数の幼稚園と保育園等で年長児向け造形教室を定期的実践している。本年度は小規模保育園で3.4.5歳児合同の造形活動や周辺地域の子どもも含めた造形制作も行った。昨年度より、題材内容も改良を加え、活動範囲が広がりつつある。教育現場で園児と関わる中、学生ではなかなか対応しきれない面も多々あることを再確認した。2024年度は保育士向け実技研修会や幼稚園教諭向け実技研修会の講師も務め、現場で働く方からの声を直接伺う機会も得、幼稚園教諭の研修会では調査も実施した。本年度も、教育現場での子どもや保育士、教員と様々な関わりをし、学ぶことは多かったと考える。

本稿では、2024年度の実践等を踏まえて、園児が造形制作を行う際の留意点を中心に、今後授業や演習の中で学生に意識させるべきことを再確認し、まとめる。

2. 2024年度の実践から

2-1 造形教室の実践から

2024年度は造形教室を実践する園が増え、対応する園児の人数も増えた。2023年度に複数園で実施した内容も、試作から全てやり直して改良した。

制作内容は、基本的に、紙材料をちぎる、はさみで紙材料等を切る、のりではる、絵を描く等である。簡単なしくみのあるものや半立体工作は、用意した型紙を使用する。題材によっては紙粘土の使用や絵の具遊びからの制作も行った。また、題材内容に応じて、工作用紙やクッキングペーパー等、種類の違う紙材料も使い分けた。

以前小学校や中学校で図画工作や美術の授業を担当した際は、意欲を持って没頭できる題材の開発、制作途中で失敗したと思わせない援助の手立てなどを心がけてきた。

昨年度から複数園で造形教室を実践して、今まで以上に個人差が大きく、園状況による違いも経験した。園児によって制作の進捗や手指の巧緻性等の個人差が大きいことは理解していたが、想定以上であった。園での経験や指導の積み重ねにもよるが、人数が多くなり、園児が難しい、できないととらえる人数が増えると、全体の進行が著しく乱れることを何度も経験した。同じ題材で同じ内容であっても園児の経験差で制作時間が違う。保育士などの補助があっても、人数が増えるとすぐに対応できないこともあった。実践を重ねてよりよい手立てを探り、内容を検討し変更しても制作時間が定まらない場合もある。このことから実践経験の少ない学生が、実習中に造形を実施しようとして戸惑うことも生じることが実感できた。

2024年度の題材内容の改良について、図1～図4をもとに説明する。どの制作も、複数園(それぞれ3園;年度で違う園もある)で年長児を対象としたオリジナル題材である。

図1は紙皿活用のパペットである。3園(42名)で実施した。難しい点は、ばねにあたる堅い紙材と紙皿の接着である。2023年度は強力両面テープを

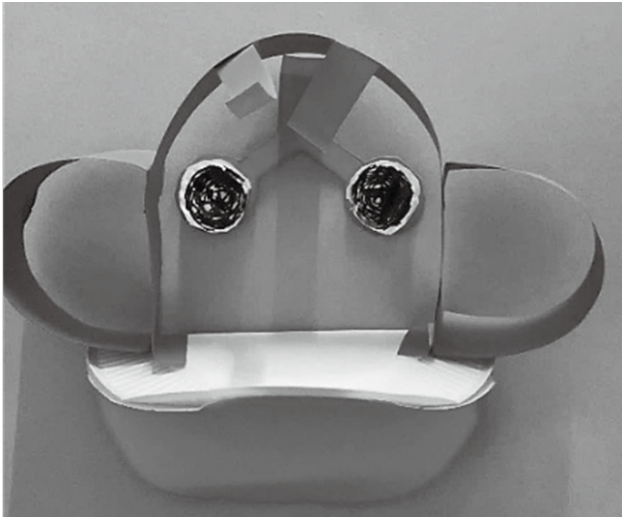


図1 試作1 紙皿使用のバベット (2023 年度版)

使用した。両面テープの使用に懸念を示す保育士もいたが、全員が使用して完成できた。ただ、押さえてしっかりテープを定着する際の力不足もあり、紙材料と紙皿が十分接着させられず、外れやすい事例が出た。個々、木工用ボンドで補強して回った。

尚、本稿の試作画像から、園児全員がこれをお手本にして同じ作品を画一的に制作するととらられるかもしれないが、決してそうではない。型紙を使用するところはあるが、簡単なくみでも確実に園児全員ができるための手立てとして使用している。例えば図1では、目と支えの部分のみ型紙を利用して制作している。目は個々で別の紙に作って貼り、口の中に貼る色紙や切り方は園児に任せている。目の違いだけでも印象は様々となる。また、全員が猿の顔をつくるのではなく、耳の形を頭部の上に三角に変形してつけたり、目の大きさや形を変えたりして、熊や猫、犬にする園児は少なくなかった。

図2は2024年度の改良型である。2園(計30名)で実施した。23年度の実施を踏まえて、事前に木工用ボンドで紙皿とバネにあたる紙材を接着し配布した。髪の毛に相当する部分は、各自で好きな色の折り紙を切って自分で考えたところに貼らせた。耳の位置によってつけない場合もあった。目の形や大きさ、口の中の違いもあり、それぞれ完成時の印象が異なった。ただ、早めに制作が終わり、時間が余る園児も出た。基本的に園児が自ら制作を進めていくことがよりよいため、事前に接着したものを配布した今回の手立ては再検討する必要がある。片側だけ接着して反対は任せ、2023年度のように、強力両面テープの活用とうまく接着できていない場

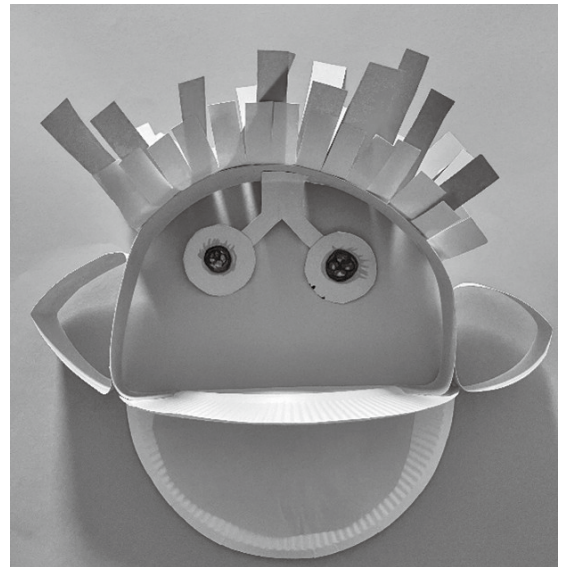


図2 試作2 紙皿使用のバベット (2024 年改訂版)

合のみ木工用ボンドで補強する手立てを行う方がよいと考える。今回は難易度が下がったためもあり、予定よりも制作が早く終わる園児が出たが、そういう園児がこのバベットが食べる食べ物を作っているかと尋ねてきた。許可したところ、折り紙や色画用紙の紙片でそれぞれ食べ物作りに熱中した。制作の遅れた園児もその様子を見て意欲持ち、最後まで制作を進めた。全員が食べ物まで完成が出来た。それまでも園児の個人差はよくあり、時間を要する園児、すぐ終わらせてしまう園児はどこの園でも目にしてきた。単純に新しい課題を与えるのではなく、できるかぎり園児の自発的な発想や行動につなげていける言葉かけや材料の準備の必要性を改めて考えさせられた。

図3、4は単純な形を使用してクリスマスツリー制作に進めていく内容である。2023年度は緑の色画用紙を長方形に事前に切り分けて与え、上の星飾

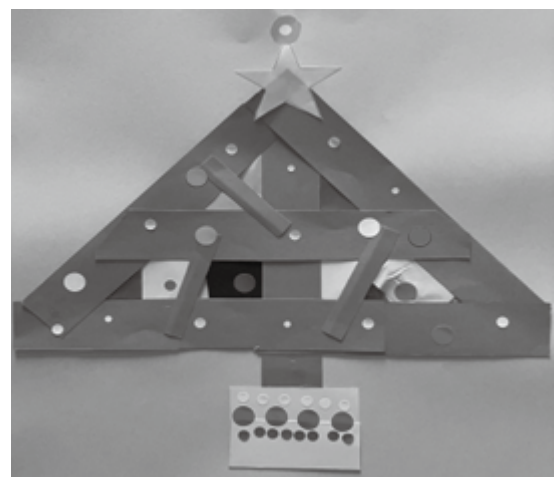


図3 試作3 クリスマスツリー (2023 年度版)



図4 試作4 クリスマスツリー (2024年度改訂版)

りに穴を開けてつるせるようにした。2園(計28名)の園児が実施した。どの園の園児もよく取り組み、保護者にも好評と

のことだった。子ども

が指でつけるのりでは、できあがって乾燥するまでに貼った形がずれることがあった。また、つるすと星飾りが重みで外れてしまうため、個々に木工用ボンドで補強した。完成時の強度にも含めた内容については、再検討する必要があると考える。

2024年度の制作では図4のように変更した。4園とカルチャーセンターでも行い、計57人の年長児が制作した。緑の色画用紙は園児に各自折って切らせた。どの現場の年長児も各自で制作を進められた。多少いびつな長方形となっても、仕上がる

と気にならなかった。接着は各自の使用するのりを使って制作させた。飾り付けを主体としたため、どこの場の年長児も60分間熱心に取り組めて完成させた。自分でプレゼントを描いて貼ったり、ツリーの回りにサンタや好きな絵を描くなど、個々の園児が制作を楽しんでいた。制作の完成度には違いもあるが、どの園児も時間内で完成出来た。

実践から、少しの改良であっても、園児の制作の進め方や制作時間、完成の状態、個々の追求の違いに反映することがより理解できた。

以上の結果も踏まえて、学生には各教育現場の状況や子どもの個々の状況も具体的に説明し、現場で子どもの制作活動を援助する際に、より子ども目線に沿って留意出来るように演習の授業内容も再検討している。

2-2 幼稚園教諭のアンケートから

2024年10月16日に、在住県内で3番目にあたる人口規模の市の私立幼稚園協会から依頼を受けて、実技も含めた研修会を行った。市内私立幼稚園27園からの参加で、行事等のため不参加となった園もあるが、計59名が参加した。表1に年齢構成を示した。若手が多いことがわかる。表2.3では4年制大学や短期大学、専門学校等に通っていた時に、現場に出てみて「造形関係の授業でこんなことを学びたかった、こういうことが学べていたらよかったのに」という内容がもしあれば、選択項目から複数選ぶという質問設定をした。全員どれかを選択していた。年齢構成に幅があるため、学生当時学んだカリキュラムや授業内容も当然違う。そのため、経験年齢によって回答の傾向にも違いがある。さらに、学生時代に学んだ造形の内容で、教育現場に出て役立ったと考えるものを具体的に書いてもらった。(表3)中には、造形の授業ではない内容も含まれていた。明確にそう判断できる内容は、ここでは省いた。(例;パラバルーン、手遊び等)

表1 研修会参加幼稚園教諭 経験年数

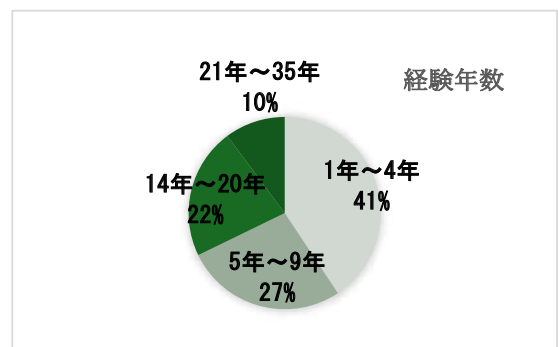


表2 養成校、短大、大学で、造形関係の授業でこんなことを学びたかった、こういうことが学べていたらよかったのに、という内容。※5名以下の複数回答項目省略

・木工作	9
・粘土制作	10
・自然物を使った工作	13
・段ボールを使った制作	13
・紙コップや紙皿を使った制作	10
・絵の具技法遊び	8
・絵の基本的描き方	14
・絵の指導法	21
・版画題材	6
・新聞紙を使った制作	8
・共同制作	8
・異学年でも活動出来る造形制作	11
・異学年でも活動出来る造形活動	10

表 3. 養成校で学んで役立った内容

☆以下	勤務年数	内容で示す
1年		ポリ袋を使用した服の制作
1年		カバン作り
1年		カラービニール袋で洋服作り
1年		毎月ごとの窓面制作
1年		お菓子の箱を使った鞆づくり
1年		様々な技法を使った絵本作り
1年		壁面装飾
1年半		新聞紙でのぼうしづくり
3年		折り紙の授業
3年		新聞紙を使った衣装作り
3年		モダンテクニック 拭き絵、スパッタリング、ビー玉転がしなどよく使っている
4年		自然物造形 紙テープを団扇であおって紙吹雪 新聞紙遊び 終わりに紙テープと同様紙吹雪
4年		花紙を使った制作
4年		絵の具を使った技法など
5年		季節のもので自由に制作
5年		絵の具やクレヨンを使った技法 新聞紙遊び
5年		画用紙を効率よく切る方法
6年		図用紙で壁面をたくさん作った
6年		折り紙の折り方や子どもへの声かけの仕方
6年		どんぐりを使用した楽器作りや制作
7年		思いつかない
8年		いろいろな素材を使った共同制作
8年		描画(皿の上にすばげっていを描く等のぐるぐる)絵の具(彩色)
9年		折り紙
15年		折り紙制作
17年		描画制作など、子どもに合わせた技術的な経験
17年		折り紙～折る工程から1つずつ作品帳にはり付けた
18年		パネルシアター ペープサート ブラッシング制作 デカルコマニー
18年		版画
20年		小麦粉粘土 土粘土 紙制作
22年		泥を使ったボディペイント
24年		折り紙
30年以上		軍手、新聞紙等で人形や輪っかを作って、いろいろな遊びに発展させられるということを知った

勤務年数が違うということは当然経験も違うということであり、1年目や2年目で年長児を担当することはそう多くはない等の園事情も踏まえるべきと考える。絵画についての指導の戸惑いについて別途尋ねた。特に年長児を扱う場合、小学校へ就学する前までにどこまで形をかけるようにしておかなくてはならないのか、細かい色の指導までする必要があるのかという具体的な悩みもあった。異学年児合同の内容も、近年そういう機会が現場で増えていることも関係すると考える。自然物を活かす題材や段ボール等の材料に関しては、園を取り巻く環境や園事情でも必要性の差が生じる。また、大学等で手軽に使用していた材料が園では揃えられないことも学生から耳にする。小学校の実習では学級費で購入してもらおう事例もあるのだが、責任実習のために学生が園児の人数分を自腹で購入した事例も珍しいことではない。

保育士向け、幼稚園教諭向け実技研修会の講師

を担当して、印象に残ったことは、制作時の参加者の手際のよさである。小学校教員向け実技研修も過去何度も実施したが、それに比較して保育士も幼稚園教諭等も制作に要する時間が短く、制作内容のテーマ選択や材料の活用も的確であった。これは保育園や幼稚園等の教育現場では、日常的に保育士も幼稚園教諭等も掲示物や行事などで造形制作や活動を実際に自らが行わざるを得ないからと考える。小学生の場合、児童が主に行う制作や活動も、園では保育士や幼稚園教諭等が実際に制作する。多少の苦手意識があっても、日常的に制作せざるを得ない状況のためもあり、その経験からと考える。現場での話を見聞きし、現場で働く方々と関わることは、学生に教えるためにも参考となることは多く、有意義である。

3 まとめ

研究室所属学生や授業を受講する学生から、実習中に造形制作や活動を行った際、思うようにいかなかった、想定外のこともあって担当教員や保育士等から多々指摘を受けたとの報告は例年あった。経験の少ない学生が実習の際に成功感や達成感が得られないことはある。実習や現場で園児の造形制作時に柔軟な対応ができるように、授業や演習でも検討し、意識づけてきたが、例年まだ不十分などところがあると反省する。また、社会に出てから教育現場で大学の学びが役立っているかは以前から気になっていたが、卒業生からたまに情報を得る程度であった。2-2のアンケート調査はその点で参考となった。

2023年より、幼稚園や保育園等で造形教室を複数実践している。過去の中学校や小学校での授業実践とは違う、想定外のことも生ずる。発達の違いをより意識するようになった。自身の実践から、実習等の際に学生が戸惑うであろうことも身をもって経験できた。また、保育士や幼稚園等の教諭の様子や園や園児の状況から、改めて園による違いも様々なあることを再確認した。研修会のアンケート調査で、現場の教員のニーズや困っていることも多少は把握できた。(今回のアンケートは10月中旬実施だったため、調査を踏まえた授業や演習での反映は本年度ではまだ不十分である。)これまで

も演習の授業などで実習時に活用できる視点は加味してきた。例えば、単に制作だけで終わらず、複数の対象年齢も想定し、ねらいや準備、言葉がけ、展開などを具体的に考えさせている。学生同士の意見交換も行い、違う視点にも気づかせてきた。当然、実習の事前指導や関連する各授業でも学生には同様の指導はしているはずである。ただ、いざ責任実習などで造形制作を行う際に、学生の思うように進まない事例もある。より多様な視点に立つ手立てを具体的に考えさせる必要はある

例えば、いくつかの材料について、それを活用してどのような制作が可能か、対象年児の発達の段階を踏まえて、テーマと内容を複数設定させたり、制作を通して準備や援助を発達によって具体的に考えさせたりもしてきた。

複数の保育園や幼稚園で年長児の造形制作を担当して、さらに改良も必要と考える。園児に造形制作を実施する際、考えていかななくてはならないことは例えば以下である。

- ・園でのその時までの指導状況とその積み重ね
- ・園児個々の造形経験とその積み重ね
- ・園児の手指の巧緻性等の個人差
- ・園児の生育環境や文化的な違い
- ・個々支援を要する園児への対応

以上はこれまでも授業等でも触れてきたことである。言葉の理解も含めて園児の個人差は大きい。担当する時期によって同じ年長児であっても発達の違いがある。個々の園児に丁寧に対応しきれなくなる事態も生ずる。例えば、経験が浅く、内容が理解できない、うまく制作が進められない園児数が多い場合である。また、日本の文化になじみの薄い園児も最近増えていることも含めて、より個々に対応できるような配慮が必要である。

さらに、以下の配慮や確認も必要と考える。

- ・園児が日常的に使用できる材料、用具の内容の確認

実習で実施しようと考えた材料がなく戸惑う事例もある。園にはあるが、実習で造形制作を実施する際に、材料や用具等を学生が個人的に用意せざるをえない事例もある。園児が日頃使用する用具等にも園による違いはある。例えば、園児の使用するのりで、スティックのりの使用を認める園もあるが、全く使用させない園もある。園児の使用するのりの

乾きが遅く、次の制作に進めないこともある。

実習時に学生が造形を試みて想定外だったという事例を過去の複数の養成校の例から少し挙げる。中には造形にとどまらない内容も含む。

- ・内容変更（その題材は先日までの実習生が行った。別内容にしてほしい。うちの5歳児はもっと出来る。少し簡単すぎるので内容を変えてほしい。）

- ・全面変更（オリエンテーションで園の担当者に指導案を見せて許可を得たのに、責任実習間近となって対象年児も内容も変更をするように求められた。）

- ・時間変更（制作を短くして遊ぶ時間をもっととってほしい。）

- ・材料変更（その材料は園では用意できない。別の材料で出来ないか。）

- ・人数変更（設定は15人だが、30人でやってほしい。）

以上も踏まえて、学生にもさらに具体的に考えさせて、より柔軟な対応が出来るように、造形関係の授業の中であっても意識づけていくことは必要である。例えば、以下を演習で課題に加えたり、意識付ける等である。

- ・同じ内容で別の材料では出来ないか、その場合の準備・手立ては具体的にどうするか

- ・同じ制作内容で時間を短縮する場合はどういう手順の変更や具体的な手立てがあるか

- ・制作後の展開（鑑賞・遊び）はどのような内容が考えられるか、人数を踏まえた場所、時間を変更できるか

- ・制作が早く終わる園児には、どのような働きかけや声かけ、材料などの提示が適切か

例えば自身の実践でも、同じテーマでも園によっては紙粘土が可能だが、園事情で内容を変更せざるを得ないこともある。全く同一の題材内容で制作時間が10分以上違う園もある。学生の実習でも野菜スタンプは既習のため、スポンジスタンプに変えて許可を得た事例もある。5歳児を対象に想定したが、3歳児となり、模様作りをシールで簡略化した事例もある。材料や手立てを柔軟に考えられることは、授業でも意識づけてはきた。具体例も踏まえて考える場は増やしているが、制作の手順や手立てもより柔軟に考える場も与える必要はある。とすると学生は指導案を書いて安心しがちである。筆

者はそこからがスタートと考える。その通りに実施できるとは限らないからである。制作手順や手立てについて、より柔軟な視点で検討する機会も大切である。実際、自身の実践でも園児の制作の進み具合や理解度の差によって全体の制作状況が変わることを経験し、個々への対応をより丁寧に行っている。だが、継続した関わりであるからできることでもあり、実習の中だけでは難しいこともある。制作が出来ない過程や場面は学生も予想しやすいが、個人差によって全体の制作状況や要する時間が変わることは想定しづらい。そういうこともあり得ることは学生にも伝えていきたい。

この2年間の経験から、複数の園児ができないことも踏まえて、園の状況によっては制作の手順や内容を柔軟に変えられるように心がけている。また、あまり園児に手取り足取り対応してはいない。基本的に園児が一人で行い、園児に任せてきた。任せてみると、園児の表現に個性もより出るし、個々の追求もでてくる。

小学校での授業実践でも心がけたが、制作の際は、意欲を持って楽しく制作することを大切にしている。また、どんな事態となってもそれは失敗ではなく別の手立てで何とかなる等は丁寧に伝えている。園児が制作することの意欲を持って就学できるように心がけている。



図5 試作5 ハロウィンポップアップ (2024年度改訂版)

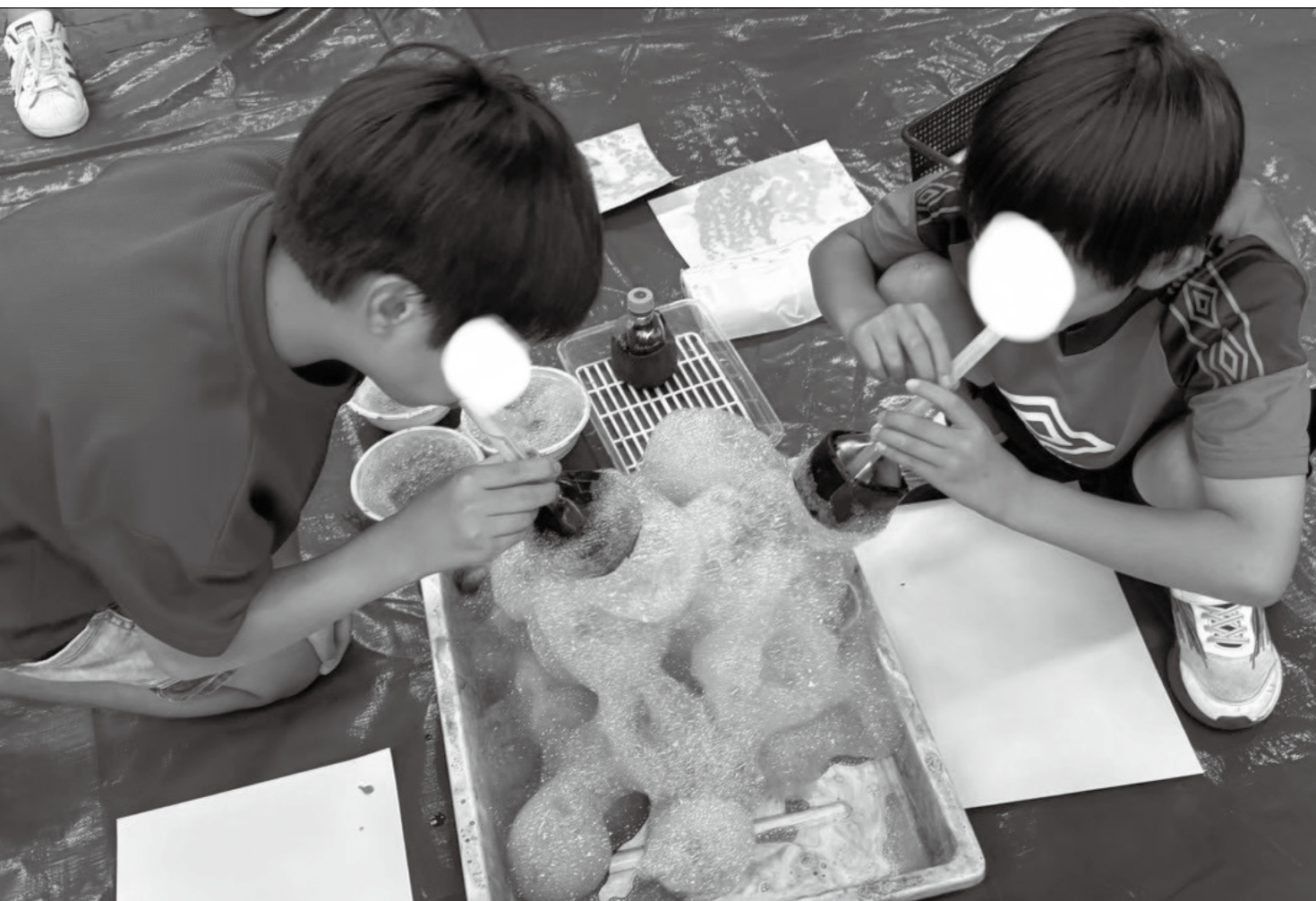
図5は、昨年度も好評だったハロウィンのポップアップの半立体工作の改良である。2024年度は窓を開けて中に描くことを加えた。紙を切る速度や細かい作業の苦手な園児でも楽しく制作が出来るようにした。例えば、おり紙を切って立ちあがるおばけや窓の開け方は、やり方を示すが、採用するかについては園児に任せた。立ち上がるお化けや窓の数、できればは園児によって違うが、完成作品をみて特に違和感はない。また、とびだすしかけに応じた大きさの問題もあり、カボチャの形は型紙を作ったが、中の顔の表現は個々に任せた。口だけ切ったり、描きたい園児はパスで描いた。はさみの使用がその時点で苦手な園児も窓を作ることは全員行っていた。窓の開閉のしぐみに興味があったためと考える。はさみの使用が得意ではない園児も60分の中でその園児なりの制作が出来ていた。

園児の状況によって、柔軟に対応するためには実践経験の積み重ねが必要である。その点、学生が実習で必ずしも出来ることばかりとは限らない。何事も経験であるし、そもそも実習は唯一失敗してよい場であることは理解出来るが、実習の結果でその免許資格取得を諦めた事例も過去にあった。想定外にいろいろと生じ得ることは常に意識させていくことは大切と考える。造形等の授業でも、より柔軟な対応が出来るように学ぶ場を増やす必要もある。

以上、園児の造形制作活動の実践から学び、題材開発や演習などの授業にも今後も探ってより学生が学べるように努めていきたいと考える。また、今後、絵画指導のあり方についても再検討をしたい。

謝辞

関係園、研修参加の皆様、参加した園児とその保護者の皆様に深く感謝申し上げます。



シャボン液と口の接触を避ける手作り拭き具を用いたバブルアートの実践

大阪大谷大学 山本将之

1. はじめに

筆者が以前作成したペットボトルで作るシャボン玉の拭き具【写真1】は、口と液の物理的な距離の近さから、シャボン液が幼児の口につく危険性を有していた。そこで、シャボン液と口の距離を遠ざける「新しい拭き具」を開発した。



写真1

本稿では新しい拭き具の提案に併せて、(公財) 富田林市文化振興事業団が主催する「すばるキッズアートフェスティバル」で山本ゼミが実施した造形あそびの実践を紹介する。

2. 拭き具の作り方

まずペットボトルを1/3程度の高さとで切断し、切断箇所には布を貼る【写真2-3】。本実践では不要な衣類を裂いて切断面に貼り付けた。そしてペットボトルのキャップにタピオカストローの径と同じ大きさの穴を開けて完成となる【写真4】。



写真2



写真3



写真4

ストローを挿すことで、シャボン液と口の距離を保つことができることはもちろん、ストローを変えるだけで使い回しが可能になる点も拭き具の特徴と言える。なおシャボン液はヤシノミ洗剤と水と絵の具を混合して作成する。

3. バブルアートの実践

本章では、バブルアートを実践した際の具体的な情報を箇条書きで記す。

・対象年齢および人数

親子連れの幼児～小学校高学年 約 200 組

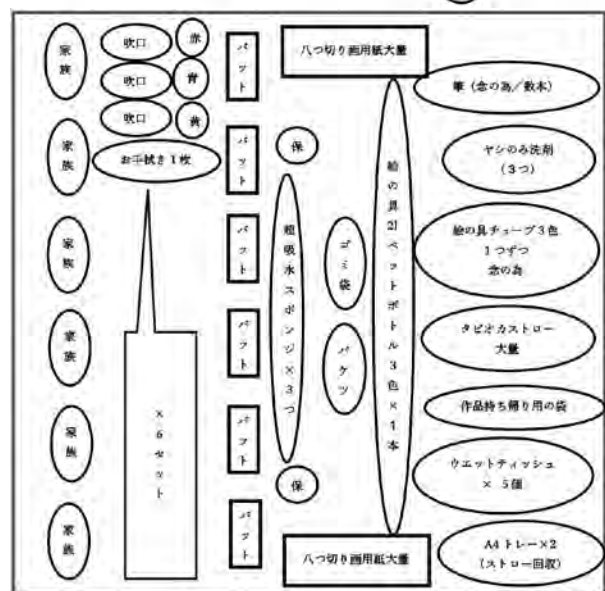
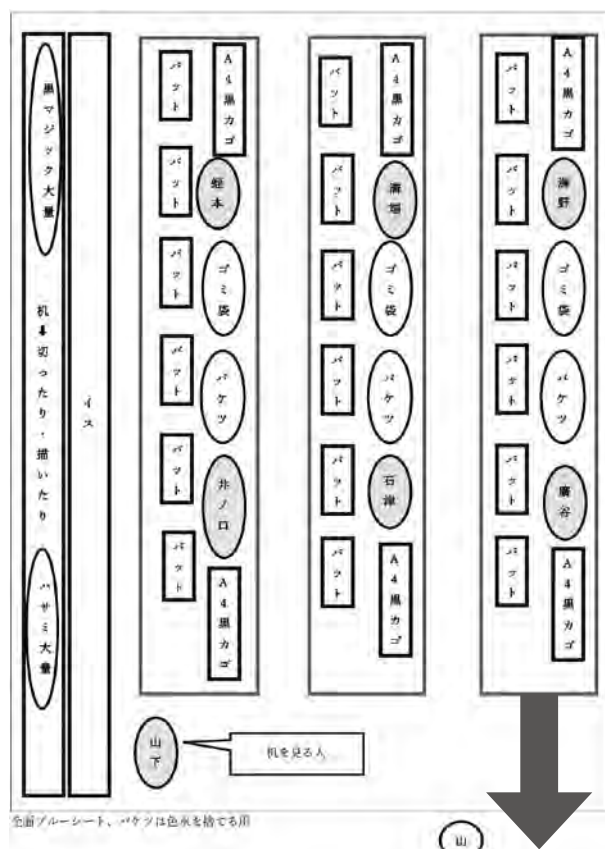


写真 上から5,6,7

・活動時間：3 時間

※時間内のブースへの出入りは自由

・ねらい

泡が出る不思議さを感じ、泡の感触を楽しむ。
泡の転写による模様作りを楽しむ。

・環境構成【写真 5-7】

材料・道具は左記環境図の通り。個人名は保育者。
次に、実践の具体的な様子を記す。

バブルアートで最も注意すべきことは「吸うこと」である。拭き具を吸ってしまうと洗剤が口に入る危険性がある。そのため、特に幼児の場合はストローから口を外して「吸う」練習と、ストローを咥えて「吐く」練習を何度も繰り返す。これにより、誤飲の防止を徹底した。



写真 8,9

活動の動機付けは「今から雲を出すよ」と言い、拭き具から泡を出す様子を示す。視覚的な驚きを促す操作の見本を示すことで、多くの子どもがこの時点で強い興味を抱く。そして、泡の上から紙を押し付けることで、泡の模様が転写される様子を示した後、子どもたちの活動がスタートする。

泡が出ることに不思議さを感じる子どもは、何度も泡を出そうと試みる【写真 8-11】。

導入で「雲」という見立ての言葉を伝えることで、

「雲みたい」という言葉や、細長く泡が出てくる様子を見立てて、「へびが出てきた」と驚く子どもの姿も多数見られた。

バットが泡でいっぱいになったら、泡を触る活動が始まる。泡はパチパチと弾けるような感触であり、その心地よさから何度も泡を触り、素材の存在を確かめるような姿も見られた【写真 12-13】。

泡の感触を存分に楽しんだ後は、泡の模様を転



写真 上から 10, 11, 12

写真 上から 13, 14, 15

写す活動が始まる。転写に際して、泡の上に置く紙を底まで押し込めば色鮮やかな模様が転写され、軽く押すと淡い色合いを楽しむことができる。また準備している赤・青・黄の泡を全てバッドに出すことで転写の際に色が混じり、多様な色合いを楽しむこともできる。紙をひっくり返し、模様を確認するときには一様に「おー!」という驚きの歓声があがった。【写真 14-17】



写真 上から 16, 17

また、転写した画用紙をハサミで切り、泡の模様を生かした表現を追求する姿も見られた【写真 18-20】。

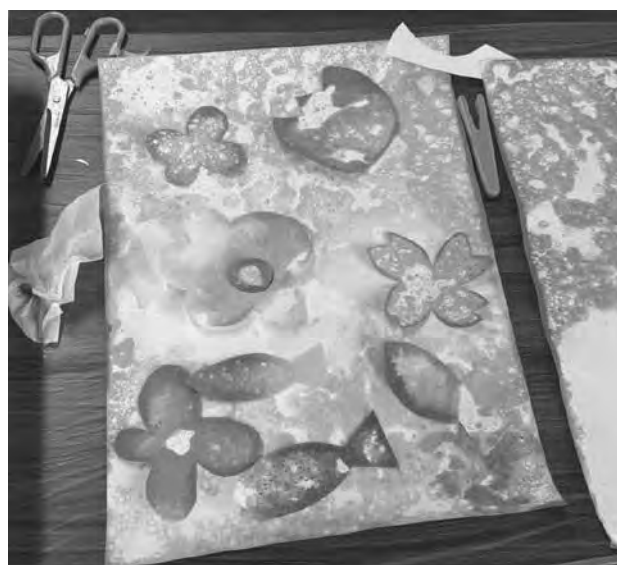


写真 18



写真 19, 20

4. おわりに

筆者はストローの無い旧型の拭き具でも、園や授業で何度も遊びを実践している。しかしコロナ禍を経て、使用済みのペットボトルに口をつけられない学生が現れたことを契機に、タピオカストローを用いる本稿の拭き具を開発するに至った。

長時間の実践を経て、子どもの口にシャボン液がつくことも無く、また誤飲などの事故が起こることも無く、無事に活動を終えることができた。また子どもの活動はとても活発であり、当拭き具を用いたバブルアートは子どもの満足感や達成感に幾許か寄与したのではないかと考える。

付記

本研究は JSPS 科研費 JP23K12781 の助成を受けた研究の一環であり、その成果の一部である。



『イソップ物語を題材とした作品製作と表現』

育英大学 渡辺 一洋

1. 実践の目的

本実践報告では、イソップ物語を美しい影絵で表現し、動物の衣装製作や墨で動物を描く絵巻物作りを進め、フィナーレでは、ファッションショーで楽しい総合表現を行った経過をまとめた。本実践活動を通じ、参加者が互いの作品の良さを鑑賞し合い、フィードバックを取り入れることで学びを共有する実践を行った。今回、参加対象となったのは、群馬県高崎市内の小学校1年生から6年生で構成される縦割りグループである。さらに、保育士または小学校教員を志望する学生がサポート役として参加し、製作やディスカッションを進めながら、総合表現発表を通じた力量形成や教育的効果を検討す

ることを目的とした。

2. 実践の経過

まず、イソップ物語を題材に選定した理由と、その教育的価値についての基軸としては、筆者が文献を整理していた際に本棚にポケットサイズのイソップ物語の影絵のイラストで描かれた本を手にし、インスピレーションを受けたことによる。そこから造形表現と表現発表の組み合わせによる子どもたちの成長促進にもつながり、縦割り集団での活動を通じた学びの多様性の追求を考える機会となった。次に順を追って活動経過をまとめていく。①影絵作品製作においては、グループごとにイソップ物語の話

を分け、物語の場面を影絵で表現する活動を行った。ここでは、短いお話の中に登場する動物をシンプルな形の影絵作品にして製作した。②今回は時空を超えた遠い昔の話というイメージから絵巻物を製作した。その際、影絵の白黒の世界をイメージして発想し、墨汁による絵巻物を春夏秋冬の4つの構成によりグループに分けて製作した。③衣装製作においては、自分の好きな動物の衣装を製作し、イソップ物語を視覚的に考えてデザインする活動を行った。④発表と鑑賞においては、完成した影絵と衣装を使い、背景には製作した墨絵の作品、ステージ上には学生が製作した壁面を配置して、保護者を鑑賞者とした発表を行った。

以上の①～④を通じて、子どもたちが物語の内容を深く理解し、創造的な表現活動を楽しむ様子が見られた。その中で年齢やスキルの異なる縦割りグループ内での協力関係が強まり、コミュニケーション能力や共感性が育まれた。サポートした学生も製作や子ども間のディスカッションを通じ、教育・保育現場での実践力を高める貴重な経験を得ることができた。



図1 スクリーンでの影絵表現



図2 大型ロール紙への墨絵描画

3. 実践の全体的なまとめ

今回参加した小学生の反応としては、物語を通じて子どもたちが楽しみながら学ぶ姿が見られた。具体的には「自分の考えた影絵や衣装を褒められて自信がついた」という声や、「発表で他の人と一緒に表現するのが楽しかった」という感想があった。今回の題材としたイソップ物語は、短くわかりやすい寓話を通して教訓を学べるため、特に子どもたちに親しみやすい内容であった。

さらに、物語を題材とすることで、創造性や表現力を育むことができ、物語を通じて、自己表現の楽しさを感じ、他者と協力することの大切さを学ぶことにもつながった。イソップ物語の代表的な話として、「北風と太陽」「うさぎとかめ」などがあるが、今回は短い話を選び、発表以外にも様々な作品製作などから多様な表現方法を提供した。

今後は、イソップ物語以外の世界の寓話も取り入れ、文化や価値観の多様性を学び造形活動を通じた総合表現発表につなげていきたいと考えている。



図3 動物の衣装(カラービニール)



図4 製作した作品を展示した表現発表

産学連携レポート



松戸アートピクニック 2024

「和紙ぞめで作る、カラフルフラッグ」

国際学院埼玉短期大学 佐藤牧子

桂屋ファイングッズ株式会社 引地貴子、福島夕貴

1. はじめに

2024年7月より全美協の賛助会員となった桂屋ファイングッズ株式会社は、1890年（明治23年）に東京日本橋に染料商として創業以来、「みやこ染」のブランド名でさまざまな染料の開発を行い発展してきた。独自の調合による「日本の心を象徴するような優しく穏やかな色」に加えて、布や紙だけでなくプラスチックなどにも対応した染料は、ものづくりにおいて大変魅力的な存在である。

2024年6月、全美協の存在を知った桂屋ファイングッズ株式会社から賛助会員への協力の申し出があり、同年7月には全美協の大成哲雄会長（写真1）と佐藤（筆者）が、東京日本橋の本社を訪れることになった。



写真1 スマホケースの染色①

日本橋本社には、さまざまは染料で染色された素材や美しい作品が陳列されている一方で、染色を行う「somenova (染めの場)」には、染料をはじめ染色機や電子秤、電子ロウ容器、五徳、ボウル、筆などがあり、まさに実験室のような世界が広がっていた。

実際に「somenova」にて布やプラスチックなどに染色する体験(写真2)を通して、改めて染色の面白さに気付くと同時に、素材に合わせて多様な染料が存在することを知り、染色の世界への興味を深めることになった。

本レポートでは、同年10月に大成哲雄会長が総合監修を努める「松戸アートピクニック2024」の特別参加枠で、桂屋ファイングッズ株式会社が行ったワークショップ「和紙ぞめで作る、カラフルフラッグ」の取り組みを産学連携レポートとして報告する。



写真2 スマホケースの染色②

2. 松戸アートピクニック 2024 の概要

期間：2024年10月12日～10月27日

9:00～17:00(入場無料)

場所：21世紀の森と広場(千葉県松戸市)

総合監修：大成哲雄(聖徳大学)

主催：松戸アートピクニック実行委員会

共催：松戸市・松戸市教育委員会

松戸市によるイベント紹介：

「松戸アートピクニックは、2017年より、松戸市の中央に位置する公園「21世紀の森と広場」が有する豊かな自然環境を舞台に、現代アートをきっかけに多様な文化的価値を創造する芸術祭として開催が始まりました。公園の豊かな環境とともに、アート作品を楽しみ、新しい自然との関わり方を発見すること、世代や言語を超え、広く交流が生まれるきっかけとなる場の創出と、多様な相互理解を目指しています。

今回も、聖徳大学美術研究室が中心となり、私たちの周りにある「世界」をアートの切り口で楽しむ場をアーティスト・市民と共に作り上げます。ピクニックを楽しむつもりで気軽にご参加ください。※」



写真3 松戸アートピクニックのポスター

※引用：松戸市ホームページ

https://www.city.matsudo.chiba.jp/shisetsu-guide/kouen_ryokuka/top/yoteihyou/MAP2024.html (2025.1.15 アクセス)



写真4 ワークショップ会場の入り口



写真5 ワークショップ会場

3. ワークショップの概要

1) 和紙ぞめで作る、カラフルフラッグ

①好きな色を選ぶ ②できあがりの模様を想像する、という2段階で楽しめて自己表現できる作品が作れる内容ということと、公園という広い場所で、子どもたちが自分で染めたものを振って駆け回って遊べたら、という理由で染色した和紙を使ったフラッグ作りをテーマとした。

2) 方法

日本の伝統的な染色技法の1つである「折り染め」の技法を使いカラフルフラッグ作りを行う。「折り染め」は、和紙などの紙を折って、染色液に浸して染めるというシンプルな技法であることから、幼児教育等の現場でも多用される技法の1つである。

3) 場所：松戸アートピクニックの屋外会場 (写真4・5)

4) 参加方法：先着順 (約 50 名)

5) ファリシテーター：引地、福島

6) 使用した染料と和紙

ワークショップでは、小さな子どもでも扱いやすい和紙専用の液体染料を使用した。フラッグ作りでは「折り染め」の技法を使ったが、「手書き・刷毛染め」も可能な染料である。和紙は、染め上がりと発色がよい和紙ぞめ用の用紙を使用している。使用した商

表1 染料・和紙の商品一覧

	商品名
1	みやこ染和紙ぞめ5色セットAセット (黄・赤・青・緑・橙) 各色9ml
2	みやこ染 和紙ぞめ5色セットBセット (黄・赤・茶・灰・紫) 各色9ml
3	みやこ染 和紙ぞめカラー50ml 全8色
4	みやこ染 和紙ぞめカラー500ml 全8色
5	みやこ染 和紙ぞめ 教材 10人用6色セット(黄・赤・青・緑・橙・茶各50ml)
6	和紙ぞめ用和紙20枚入り
7	和紙の手染めキット 鮮やかな5色 (和紙4種7枚+5色Aセット)
8	和紙の手染めキット 深みのある5色 (和紙4種7枚+5色Bセット)

品は(表1)の通りである。

7) 染料以外の準備物

■フラッグ：事前にフラッグを2種類の形に切っておき、柄に巻き付ける側には補強のために透明テープを貼っておく。

■フラッグの柄：丸棒(直径1cm)にカラーテープ(黄・橙・青・桃)を斜めに巻き付けておく。

4. 当日の様子

当日は、屋外活動日和ともいえる晴天に恵まれた。多少、風が強い時間帯もあり、材料が風に飛ばされないように気をつかう場面もあったが、出来上がったカラフルフラッグが青い空の下で参加者の笑顔とともに風にたなびく様子からは、風もまた大切な材料の1つであると感じられた。

参加者は、事前にワークショップの内容を知っている人もいれば、アートピクニックの作品や他のワークショップをめぐる中で、興味を示して参加する人もいた。アートピクニックがはじまると(9:00開始)早々に参加者が訪れ、その後は途切れることなく親子連れの参加者をはじめ、県外からは大学の卒業研究で和紙について研究している学生が訪れたり、子どもの洋服を製作販売している方が参加したりと、さまざまな方に興味を示してもらいカラフルフラッグ作りを行った。

参加者は、まずフラッグ(和紙)の形を選び、和紙を手の平に乗るくらいの三角形に折っていき、三角の角部分を染色液に浸して染色を行った。小さな子どもたちは保護者と一緒に行っていたが(写真6)、自分でできる子どもたちは、三角に折られた和紙の角に染料を浸しながら「この真ん中に色を付けたいんだよな～。どうやったらつくかな。」などと言いながら、スポイドを使って余白に色を入れたりして、みな一様に真剣な眼差しで折り染めをしている姿が印象的だった(写真7・8)。

折り染めの魅力の1つは、和紙を開いた時にどのような模様になっているのかを想像して、ドキドキしながら染色された和紙を丁寧に開いていく瞬間にある(写真9)。和紙を開いた瞬間、参加者から

*フラッグ、柄ともに、当日に参加者が好きな形や色を選べるようにした。

■その他：フラッグを刺して置いておくための発泡スチロールブロック、染料入れ、スポイド、ゴム手袋、ビニール製テーブルクロスなど。



写真 6 折り染めをする親子



写真 7 折り染めをする子どもたち



写真 8 折り染めをする大学生



写真9 染色した和紙（開く前）



写真10 染色した和紙を開く子ども



写真12 カラフルフラッグと子どもたち①

漏れる「うわ〜」という感激の声が、折り染めの楽しさを物語っていた（写真10）。

最後に、好きな色のフラッグの柄を選び、染色した和紙を貼り付けて完成（写真11）。同じ模様が1つとしてないカラフルフラッグを風にたなびかせながら、参加者は笑顔で会場を後にした（写真12・13・14）。



写真11 完成したカラフルフラッグ

5. ワークショップを終えて

「みやこ染」が行ったワークショップでは、和紙を折って好きな色の和紙用染料にディップし、広げたときの模様もあわせて楽しめるフラッグを制作してもらった。2～3歳の小さなお子様から、和紙を勉強されている大学生、お散歩をされていた大人の方まで、それぞれが「どの色にしようかな」と思い

思いの数色を選び、どのような模様ができたのかワクワクしながら和紙を開く姿がとても印象的だった。

終了時間前に和紙や棒がなくなった後も「作れますか」と訪れるご家族もいらっしやり、残っていた和紙の小さな切れ端を染めて、周りに落ちていた木の棒に貼って一生懸命振って遊ぶお子さんの姿も見られ、アートの楽しさが自然と広がる様子に私たちも嬉しくなった。(引地・福島)



写真 13 カラーフラッグと子どもたち②

6. おわりに

松戸アートピクニックの会場には、さまざまな方が来場していた。撮影を行っていたコスプレイヤーの方は、フラッグ作りには参加しなかったものの、コスプレと染色は、(ウィッグの染色など) 切っても切り離せない関係にあることや、自分の祖母がずっと染色の仕事をしていた話をしてくれた。また、ベビー服の製造販売に携わっている方からは染色に関する専門的な相談もあり、改めて「染色」ひとつをとってもさまざまな繋がりや発展があることを知る1日となった。産学連携の取組みは、造形美術教育における新たな繋がりや展望を見出す機会になるという点からも、引き続き積極的に取り組んでいきたいと考えている。(佐藤)



写真 14 カラーフラッグと子どもたち

全美協交流会

若井産業(株) で 釘三昧

◆ 報告 ◆

鳥越亜矢
中国短期大学

小西悟士
埼玉大学教育学部附属中学校

重田祐貴
若井産業株式会社

写真1 小西悟士先生作成のポスター

若井ホールディングス株式会社（以下、若井 HD）は令和 6 年度から本協議会賛助会員になった企業である。若井産業株式会社（以下、若井産業）はその母体であり、現在は若井 HD のグループ会社である。

若井産業の重田氏が 2024 年 4 月 11 日に中国短期大学を訪問した折に話した、釘やねじなどのファスナー素材はその建物を使う人の意識には上らない存在であること、そしてファスナー素材という言葉が筆者（鳥越）の心に残り、釘やねじはつなぐもの、結び付けるものなのだ改めて意識したことを覚えている。

1. 全美協交流会の背景及び経緯

若井 HD と全美協との出会いには、幸運な偶然の重なりがある。そして、いくつかの背景や経緯が結び付いて、今回の全美協交流会の企画・実施に至っている。

2023 年 9 月、大阪で開催されている「手づくりフェア」という手芸やホビーを題材にした展示会に初めて若井産業が出展した。そこに全美協副会長である四條啜学園短期大学の香月欣浩先生が立ち寄った。この 2 つの偶然が重なったことにより、若井 HD と全美協が出会ったのである。香月先生によると、他のブースが静かなワークショップを展開する中で、釘を木材にトントン打ち付ける音が目立っていたそうである。この出会いを起点として、全美協加盟大学のうち、四條啜学園短期大学の香月先生、大阪人間科学大学の仁木裕美先生、東北文教大学の篠永洋先生が、若井産業が開発・製造している釘を用いて、それぞれに探求的な授業実践を行った。その成果は 2024 年 2 月に全美協造形美術教育フォーラムで発表された。鳥越はそのフォーラムの参加に先立ち、大学に届いた若井産業製のカラー釘に魅了された。そして釘の新たな価値創造の可能性を感じ、カラー釘を身につけてフォーラムに参加したところ、皆がそれを面白がった。(写真 2)

後日、国際学院埼玉短期大学の佐藤牧子先生から、埼玉大学教育学部附属中学校の小西悟士先生に若井産業の重田氏の紹介がなされた。その折に、釘アクセサリーを含めた鳥越の探求活動が小西先生に伝わった。実は小西先生はもともと全美協の中核をなす聖徳大学の大成哲雄先生や武蔵野美術大学の三澤一実先生らと深い縁のある先生であった。三澤先生が企画・運営していた「もう一つの図画工作・美術なんて

写真 2(左)
鳥越亜矢作成の釘 アクセサリー

も展覧会」(2007)¹⁾ や、大成先生も関わっていたうらわ美術館での「え? 授業の展覧会～図工美術を学び直す～」(2013)²⁾ の DNA を小西先生が引き継ぎ、「はみ出す力」展として現在も企画・運営しているのである。そのような経緯のある小西先生と鳥越が、重田氏や佐藤先生を通じてつながった。

その一方でフォーラム以降、鳥越は重田氏と交流を続け、2024 年 6 月に中国短期大学のオープンキャンパスで釘のワークショップを行ったり、滋賀県内の保育現場において釘の実践の機会を得たりした。また、それをもとに、日本美術教育学会で香月先生、仁木先生とともに釘の実践を発表することになった。³⁾

今回の全美協交流会「若井産業(株)で釘三昧」(以下、「釘三昧」)にはこのような背景と経緯があり、企画に至った。

会の目的は全美協に加盟している大学教員と賛助会員、並びに全美協やその大学教員の活動に興味関心を寄せる人たちとの交流であり、本稿はその報告である。

2. 概要

日時：2024 年 8 月 26 日(月) 13:30 ～ 16:40

場所：若井産業 大阪府東大阪市森河内西 1 丁目 6-30

参加総数：18 人

<内容及び担当>

- ・司会進行：鳥越亜矢
- ・進行サポート：香月欣浩・仁木裕美
- ・社内ミュージアムツアー・製釘体験：重田祐貴(写真 3)
- ・実践発表：小西悟士・鳥越亜矢
- ・ワークショップ「思い思いに釘三昧」



写真 3 社内の見学

3. 埼玉大学教育学部附属中学校 小西悟士による報告

1) 若井産業(株)、全美協との出会い

筆者(小西)は、武蔵野美術大学空間演出デザイン学科でファッションデザインを学び、ファッションを衣服の形や色彩、素材の研究だけに止めず、アートやコミュニケーションなどの領域との融合を目指して作品を制作してきた。また、身体をめぐる芸術表現として、「身につけるアート」を制作することで、より豊かな発想力と柔軟な感性を身につけることを学んできた。(写真5・写真6)

ある日、国際学院埼玉短期大学の佐藤牧子氏から、若井産業株式会社の重田祐貴氏を紹介していただく機会があった。そこで、筆者(小西)が過去に様々な素材で衣服やアクセサリを制作してきた事例を紹介すると、中国短期大学の鳥越亜矢氏が釘を使ってネックレスを制作していると紹介された。それらの作品を見た時、鳥越氏の制作活動や研究に興味を持ち、全美協の交流会「釘三昧」に参加することとなった。

2) 釘とファッション

全美協交流会「釘三昧」に参加する際、筆者(小西)の授業実践や教育活動について紹介することになった。さらに、若井産業の製品を使った作品制作を進め成果物を発表することになった。そこで筆者(小西)は、単に釘を身に着けられる作品を制作するのでは、鳥越氏が制作した作品の模倣になると考え、自分ならではの感性で作品を制作し発表しようと考えた。

作品のテーマを考える中で、「昔の職人は釘の強度を上げるため、あえて釘を錆びさせて使用した」という重田氏の話から着想を得て、錆びをテーマに生地染色を試みた。しかし、思うように錆びが定着せず、筆

者が思い描く表現には至らなかった。そこで、他に錆びたように見せる方法がないかと過去の経験を遡り、黒色の生地を脱色することで錆を表現できないかと考えた。まず、生地に釘を置きその上から漂白剤を吹きかけて放置した。すると、生地は赤茶色に変色し釘を取り除くと釘の形が残った。さらに、釘の形をくっきりと残すため、噴射器のノズルを変えて細かく噴射するなどして試行錯誤を続けた。最終的に黒色のTシャツを漂白し、その上に若井産業のロゴマークをプリントして作品を完成させた。(写真7) 注意点としては、漂白剤を噴射する際、目や鼻、喉を痛めるため充分に防護する必要がある。

また、筆者(小西)の元教え子で、現在、ファッションデザイナーとして活躍する千葉美緒氏に釘を使ったファッションアイテムの制作を依頼した。数週間後、ビニール素材に釘を挟みこんだバッグを完成させた。(写真8・写真9)

3) イメージビジュアルの制作

筆者(小西)は、ファッションアイテムの他に、自分ならではの感性で釘を美しく撮影したイメージビジュアルを制作した。そもそも、釘自体が用と美を兼ね備えた優れたデザインであるため、その美しさを引き出すような写真撮影を試みた。例えば、連結釘をLEDライトで照らして撮影をすると、金属に光が美しく反射し見たことのない釘の魅力を引き出すことができた(写真10)。また、コピー機の上に連結釘を置き移動する光を追うと、歪んだ釘の画像を読み取ることができた。本来、容易に曲がるはずのない釘が、まるで植物のようにしなやかに曲がる画像が完成したのであ



写真5 ワーム(擬似餌)を使ったアクセサリ作品



写真6
針と布のみを使って
制作した衣服作品



写真7 黒い生地を漂白して錆びを表現した作品

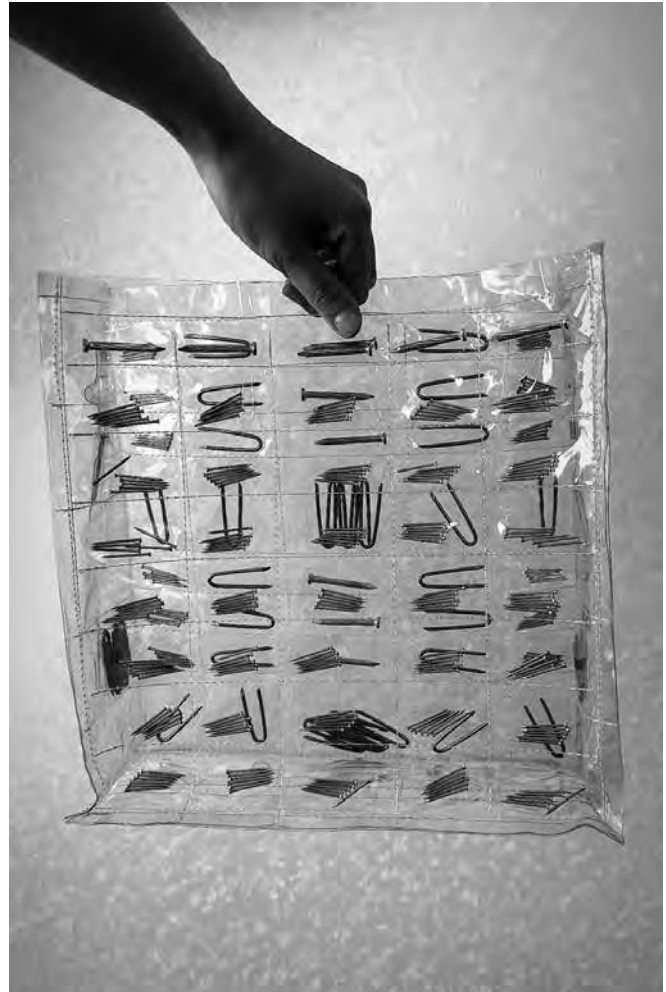


写真8 4種類の釘をビニールシートに挟んで縫い付けた

る(写真11)。もう1つは、ペットボトルの中に水と釘を入れ凍らせ、溶けていく様子を撮影した。氷の中から少しずつ現れる釘の姿は、まるで現代アート作品のように美しく感じられた(写真1)。

撮影した写真は、若井産業のロゴマークを入れA1サイズで印刷し、5種類のイメージビジュアルを完成させた。



写真10 連結釘に光を当て撮影した写真



写真9 チェーンを取り付け、ショルダーバックにした



写真 12「釘三昧」でプレゼンテーションする様子



写真 11 連結釘をコピー機で読み取った画像

4)「釘三昧」でのプレゼンテーション

全美協交流会「釘三昧」では、作品をプロジェクターやTVモニターで投影するのではなく、ポスターやTシャツ等の現物にして紹介し参加者を惹きつけようと考えた(写真12)。プレゼンテーションを聞いた重田氏は、「釘は、物と物とを結合する道具であり、打ち込まれた後はほとんど形が見えなくなる

が、ここまで釘全体に焦点を当てて作品化することに驚いた」と語った。また筆者(小西)も、誰もやったことのない挑戦に対し、夢中になって釘の可能性について探求を進めることができた。

今後も、ファッションデザイナーの千葉氏と協働し、新たなファッションアイテムのデザインと、釘とファッションの可能性について探求していく。

4. 中国短期大学 鳥越亜矢による報告

1) 釘の活用コンセプト

若井産業から大学に届いたのは『Nail it!! (ネイルイット)』⁴⁾ という、少しだけ板に打ち込んだ釘に色とりどりの糸を掛けて絵画的な表現を楽しむ「ストリングアート」に使用するカラー釘であった。それを見た途端、筆者(鳥越)はそのサイズや色の多様さに「とても美しくてかわいい」と感激した。しかし、それと同時に以下のことを思ったのである。1つは、釘としての通常通りの使い方である。つまり、釘は打たれたら頭部しか見えなくなり、固定されて動けなくなる。もう1つは、「ストリングアート」におけるカラー釘の在り方である。糸掛けをすると、美しいカラー釘の胴部が糸に覆われてしまい、見えなくなる。これらのことを筆者(鳥越)はとてももったいないと思ったのである。

そこで、筆者(鳥越)は釘の活用コンセプトを次

のように定めた。それは「打たない、動かす、見せる」の3点である。そしてこのコンセプトに沿った活動を考えて実施した。



写真 13 HUG BLOCK (ハグブロック) での造形物

なお、保育現場での活動についてはすでに第 73 回日本美術教育学会学術研究大会静岡大会⁵⁾で発表しているため、重複を最低限にして報告する。

2) 星の子保育園での釘ワークショップ

日時：2024 年 6 月 12 日

10:00～11:30(主に 3 歳児と 4 歳児 48 名)

13:30～15:00(主に 5 歳児 31 名)

場所：認定こども園星の子保育園 園庭

滋賀県大津市雄琴 2 丁目 17-13

対象：3 歳児～5 歳児 79 名

内容は ①強化段ボールへの釘打ち、②板に釘打ち後のゴム掛け遊び、③ HUG BLOCK(ハグブロック) 体験、④釘刺し教材への釘刺し遊び(網戸の網やスポンジ)である。上記の釘ワークショップ(以下、釘 WS)は若井産業のライフインプルーブメント事業部との協同で実施した。

①強化段ボールへの釘打ちでは、3 歳児でも道具の使い方をすぐに身に付けて釘打ちしていた。②板に釘打ち後のゴム掛け遊びでは、対称性に意識が向かう活動となっていた。③ HUG BLOCK(ハグブロック) 体験は釘を使ったものではないが、若井産業の DIY グッズを使って様々な板を挟み込み、友達と協力したり大人に手伝ってもらったりしながら、六角レンチを使って立体物を作っていた。(写真 13)

午前中から釘 WS に携わっていた重田氏は、①②③の活動について午前中の 3・4 歳児と、午後の 5 歳児の様子の違いに驚いていた。重田氏は夢中で活動しているのはどの年齢でも同じだが、活動中の話し声が 3・4 歳児は 5 歳児に比べて明らかに少ないという印象を持った。この園の 5 歳児の保育室には普段から鋸や工具を置いており、子どもたちは

普段からそれらを使っているそうである。筆者(鳥越)はこうした 5 歳児の状況を園長から聞いたうえで次のように推察した。3・4 歳児は自分の釘打ちに集中して話をする余裕がなかったが、5 歳児にはそうした経験があり、その分周りを見て友達と話をしながら活動する余裕があったと考えた。

④釘刺し教材への釘刺し遊び(網戸の網やスポンジ)は、午後から行った 5 歳児の活動だった。子どもたちは釘を打つのではなく刺すことに驚きながらも、釘刺し教材として用意した網戸の網を張った丸い枠やスポンジに興味を示した。そしてそれらに簡単に釘が刺せることがわかると安心して活動した(写真 14)。

網の上に絵を描くように釘を刺す子どもがいる一方で、網を張った釘刺し教材に釘を刺し、それを紙箱の蓋の上に載せ、下から磁石を当てて動かし、歓声を上げて喜ぶ子どももいた。そして磁石に反応して動く釘や動かない釘があることを不思議がりながら、釘の動きやカチカチという音も楽しんでいた。

スポンジに釘を刺す遊びでは、子どもたちがスポンジの色や形を何かに見立てたうえで釘を刺していることが確認された。

そのうち、釘の取り皿として使っていたプラスチック製の鉢受け皿の下に磁石を当てて動かすと、中に入れた釘が動くことを 1 人の子どもが発見した。そして、自分なりに考えて磁石を動かしながら、生き物のように釘が動くさまをその音とともに五感で楽しんでいた(写真 14)。筆者(鳥越)は事前の教材研究で、釘を刺した教材を紙箱に入れ、その下から磁石を当てて動かすと釘が磁石に反応して動くことは確かめていた。しかし、プラスチック製の鉢受け



写真 14 釘刺し教材で遊ぶ 5 歳児



写真 15 皿の下に磁石を当てて釘を動かして遊ぶ

皿でも同様のことが起きるとは考えておらず、それを試すこともしていなかった。改めて探求的な教材研究の面白さ、楽しさを子どもたちから教えられた。

子どもたちの活動からは、発見、驚き、不思議に思う気持ち、もっとやりたい、こうしたらどうなる？という思考や面白い、大好き、やってみたいなどという、「!」「?」「♡」で表されるような様々な思考や気持ちが生まれていた。子どもたちの釘の活動で起きているこうしたことや発揮している力について、長年保育の視点として筆者（鳥越）が活用している、「面白い」を捉える「5C」の力⁷⁾で読み解き、解説した（図1）。

3) 短大の授業における釘の実践

中国短期大学の2年生が選択受講する教養科目「芸術」の授業と、同短期大学保育学科1年生の必修科目「保育内容の理解と方法A」の授業において、若井産業製の釘を用いた授業を行った。

①教養科目「芸術」の授業

油粘土を使い、縄文土器の模様作りをする中で縄などを転がしたり、当時の暮らしの中で使えるものを用いたりして模様を付けることを現代にある物でやってみたらどうなるかという問いを立て、2024年4月18日に実施した。教室にある様々な廃材のほか、釘でもやってみた。様々な釘を使って押し付けたり転がしたりして模様づくりを試した（写真



写真16 「芸術」での釘の実践

16)。転がすと釘の胴部の形状の違いでそれぞれ異なる模様になり、図らずも釘の違いを実感した。また、様々な部位を押し付けることにより、多様な模様を生み出すことができた。

②必修科目「保育内容の理解と方法A」の授業

写真17は2024年7月1日の授業で、建築廃材を活かした造形活動として本学保育学科の1年生が作成した、「ビー玉転がし」である。写真18は、2024年8月21日に行った、本学科のボランティア活動に参加した4年生男児による「くぎうちめいろ」である。この活動は本学の近隣にある小学校の学童保育の子どもたちが本学の造形教室にやってきて、岡山の地元企業から提供された建築廃材を使って、造形活動を楽しむイベントである。写真17の

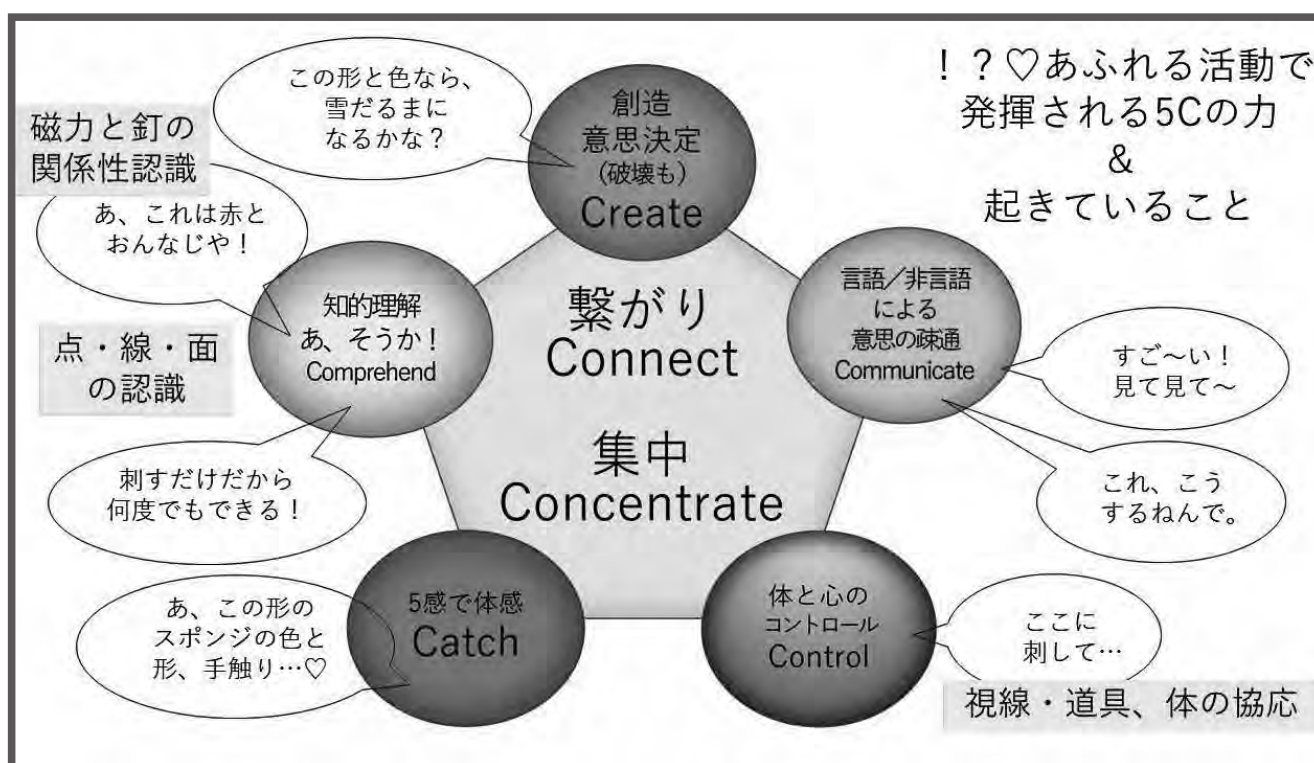


図1 釘活動で起きたことの解説に用いた図

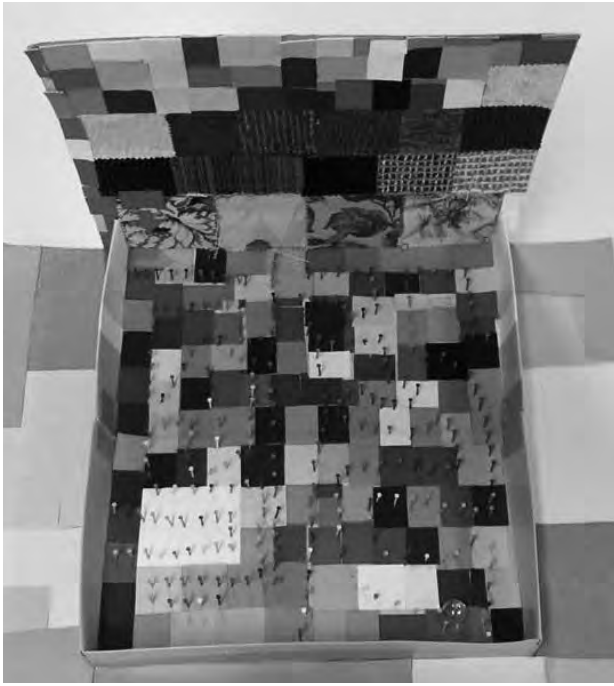


写真 17, (左) 18 (右) 釘と建築廃材を使った学生と学童の作品「芸術」での釘の実践

学生作品を参考にして作っていた学童に、筆者（鳥越）が釘を打つ本数を抑えるために、カラーゴムを釘に引っ掛けるようにしてはどうかと提案したところ、写真 18 右の作品になった。活動時間内に完成したことのほかに、ゴムの掛け方を毎回変えることができることも、この児童には魅力だったようである。作品は 2024 年 11 月 17 日に岡山市内の商店街で展示された。

4) 釘とファッション

筆者（鳥越）は「打たない、動かす、見せる」独創的な釘の活用として、保育や授業実践のほかに、カラー釘を使ったアクセサリ開発にも着手した(写

真 19)。

初め、釘が容易に刺せる素材として、総針テープというテープ状のニット素材を入手して、ネックレスやブレスレットを試作した。しかし留め具として総針テープの両端に埋め込んだ磁石がニットの網目からはみ出たり、総針テープを製造した会社が倒産したりしたため、「くつつく伸縮包帯」や、面ファスナーといった素材を試したり、別会社のテープ状のニット素材などを土台にして現在も試作を重ねている。

今後も授業、保育現場、ファッションにおける釘の「打たない、動かす、見せる」活動の展開を図りたい。



写真 19 釘アクセサリーの試作

5. ワークショップ思い思いに「釘三昧」

会場には筆者（小西）の展示物や、筆者（鳥越）が作成した教材や釘のアクセサリーのほか、香月先生の大学で作った釘などを使った巨大迷路も展示していた。実践報告の後、参加者は会場内の展示物を見たり、釘教材を試したり、子どもがしていた釘打ちとゴム掛けをしたりと、思い思いに釘を楽しんでいた（写真 20,21,22）。



写真 20(上),21(中),22(下) 思い思いに釘三昧する会場の様子

6. 「釘三昧」参加者の感想

参加者にはフォームでアンケートを依頼した。回答件数は8件であった。

1) 本日の内容で新たな価値を見つけられましたか？

- ・東大阪の中小企業が保育、教育に大きく貢献されていることへの驚き
- ・教材としての「釘」の可能性の大きさ
- ・「釘」を使った保育、授業の多様な実践例
- ・「面白いこと」ことを追求する大人の熱量
- ・釘打ちの際に洗濯バサミが活等（ママ）できる点は目から鱗でした。
- ・「素材や道具×アート」「ものづくり」などの、子どもたちにとっての価値を再考する機会となりました。若井産業さんの歴史や工夫を知ることができ、これも人の本質、仕事の本質としても刺激的なものでした。
- ・モノに対し、いろんな角度から見る景色が違いうように、新しい知識を知る機会となりました。
- ・産学協同について具体的な例を体感的に学ぶことができた。
- ・多様な背景を持つ人が1つの素材をとことん探求することで、多様な解釈と表現に結びつくことに気づかせてもらえた。普段の授業という枠組みの中ではここまで時間をかけて探求することが難しくもあるため、素材がいかに1人ひとりの日常に入り込めるかも大事だと感じた。
- ・釘という材料について、実際に体験してみると、その面白さや用途の広がりを感じることができました。

2) 今日の経験はあなたの今後はどうつながりそうですか？

- ・「ハッ、面白そう!」と気づいたときには、すぐに行動できるように、何が自分にとって「面白い」のかを考え直すきっかけになった。
- ・早速次年度の授業で生かしたいと思います。
- ・私自身、楽しい!という感覚がまず1番でしたので、子ども達にもそうした体験を通して成長できるような環境を意識して、実践してまいりたいと感じております。
- ・身近な生活の中で積極的に他者（他社）と関わる取り組みを進めたい。

- ・探求のおもしろさを改めて感じた。今後の素材との向き合い方や自分らしさとは何かについて深く考えるきっかけとなった。
- ・幼児に指導を行う上での選択肢の一つとして釘の提案をすることができる。
- ・幼児の造形活動の材料として釘を使った実践を試そうと考えています。

3) そのほかの感想

- ・大変、学び多き交流会でした。企画、運営、準備に至るまでご尽力いただき感謝申し上げます。ありがとうございました。
- ・保育の内容だけでなく、若井産業（釘）の歴史や、釘とファッションの融合など、多角的な視点から学びが深まりました。とても貴重な経験となりました。ありがとうございました。
- ・企業の方の社会貢献への意識を感じた。大学と教育現場、地域や企業など可能性を強く感じた。ありがとうございました。
- ・一般的にはメジャーではないユニークな素材を扱うメーカーはまだまだあると思うが、その価値に気付かないまま廃業するケースも多いと感じる。美術教育に関わる者として、教育現場や子どもたちの生活に繋げる橋渡しをすることが大事だと感じた。教育現場だけで閉じてはいいけない。とにかく楽しい研修をありがとうございました！
- ・この度は参加させていただき、誠にありがとうございました。釘の多様な用途やその面白さを実感するとともに、釘の製造工程についても学ぶことができ、大変有意義な時間を過ごせました。鳥越先生をはじめ、岩井産業のみなさま、小西先生、香月先生、仁木先生に心より感謝申し上げます。また、このような機会がございましたら、お声がけいただけますと幸いです。今後とも、よろしくお願い申し上げます。
- ・提出が遅くなり、申し分けありません。交流会を企画、実施をしていただいた皆様、ありがとうございました。

7. まとめ

交流会を通じ、釘というファスナー素材の魅力をそれぞれに見出し、独創的で常識にとらわれない多方面にわたる釘の新たな活用法や可能性の探求を、様々な方法で交流会参加者と共有することができた。参加者からのアンケート内容を見て分かる通り、様々な活動で企画者、実践者、参加者共に大変充実した交流会となった。まとめとして若井産業の重田氏の言葉で締めくくる。

建築用ファスナーという、建築においてなにかとなにかを繋ぎとめるものは、どれも決して目立つことはない。むしろいかに目立たずに留め付けているかが好まれる。そんな、「縁の下の力持ち」である建築用ファスナーの中にあっても「釘」は今その活躍の場が「ねじ」に奪われて、確実に生産量を減らしている。若井産業で「釘」を少しでも後世に残していきたいという思いから「Nail it!! (ネイルイット)」というカラフルな釘と糸を用いたストリングアートを楽しむための企画が動き出したのは約5年前のことである。ストリングアートにおいてもストリング=糸であり、文字通り釘は主役ではない。しかし全美協の先生方はそんな裏方の釘に素材としての魅力を見出してくださり、釘が主役の探求活動が次々と生まれる。釘をあらゆる素材に打ち込む、釘なのにハンマーで叩かない、釘を刺す、釘を磁石で動かしたり、釘の音を楽しんだり、釘を身にまったり…今まで釘がこんなにも本来の用途以外で注目されたことはまずなかったのではないかな。釘をハンマーで叩くという概念を取り去り、カラフルな釘を最大限に活かして、楽しむ。そしてそれを教育、保育の現場で実践する。

本来は木材と木材を繋ぎとめるための「釘」が、全美協と若井産業を繋ぎ始まった釘の探求活動。釘を通してこれからも人、素材、現場など新たな出会いがたくさん生まれることを願う。世の中から減り続ける「釘」を残したいという思いを、素材を活かして遊ぶという新しい形で実践する全美協の先生方に深く感謝いたします。

註・引用

- 1) 1億人の図工・美術編集委員会 企画編集, カシヨ出版センター, 2008. 8
- 2) 会期: 2013年9月14日~10月27日
会場: 埼玉県うらわ美術館 <https://jhsart.net/?p=6595>
(2025年1月3日閲覧)
- 3) 香月欣浩, 仁木裕美, 鳥越亜矢, 2024, 「釘から始まる美術~つながる素材との出会いで生まれる新たなつながりと価値創出~」, 『第73回日本美術教育学会学術研究大会静岡大会要項』, p.6
- 4) 『Nail it!! (ネイルイット)』
https://store.wakaisangyo.co.jp/pages/nailit-about?srsId=AfmBOooavqKK8sQpNtijR_fxnb6u5L2mjXUrIbi00vEfWeKWQwBbsvR
(2025年1月3日閲覧)
- 5) 香月, 仁木, 鳥越, 同上, p.6
- 6) HUG BLOCK (ハグブロック)
https://store.wakaisangyo.co.jp/pages/hugblock-about?srsId=AfmBOooXjziwLO7QBq-a8eM1fj3MvvQUHfB-MRpdH8Q4_ZaP0syFtN40
(2025年1月5日閲覧)
- 7) 「面白い」を捉える「5C」の力やその視点活用については以下の文献に詳述している。
鳥越亜矢, 2021, 「「面白い」を捉える5Cの力、保育の「型枠」から保育の「芯」になる」, 日本美術教育学会「70周年記念論集」編集委員会(編), 『未来につなぐ美術教育(日本美術教育学会70周年記念論集)』, 三元社, pp.6-16

謝辞

この度の実践、研究、交流会に際し、若井HD、若井産業の皆様、並びに認定こども園星の子保育園の皆様にご多大なるご協力をいただきましたこと、深謝いたします。

全国大学造形美術教育
教員養成協議会規約
等

全国大学造形美術教育教員養成協議会規約
大学造形教育連絡協議会規程
全国大学造形美術教育行員養成協議会賛助会員 内規

全国大学造形美術教育教員養成協議会規約

本協議会は、全国大学造形美術教育教員養成協議会と称する。

本協議会は、全国の大学及び短期大学における造形美術教育に関わる保育士及び教員養成の充実をはかり、造形教育の振興に寄与する。

本協議会は、前条の目的を達するために次の事業を行う。

1. 保育所、幼稚園、こども園から高等学校までの造形美術教育の、教員、保育士養成に関する連絡、協議、研究の交流。
2. その他、協議会の目的達成に必要な事業。

本協議会は、造形美術教育に関わる、教員、保育士養成課程の認定を受けている大学、短期大学の教員を以って組織する。

本協議会に下記の役員を置く。

1. 会長 1 名、副会長 2 名、委員若干名、常任委員若干名、監事 2 名。
2. 役員は次の任務を分掌する。
 - (1) 会長は本協議会を代表し会務を総理する。また会議を招集する。
 - (2) 副会長は会長に事故がある場合にその職務を代行する。
 - (3) 委員は役員会において本協議会の運営及び事業の起案について協議し執行することができる。
 - (4) 常任委員は本協議会の運営及び事業について起案することができる。
 - (5) 監事は本協議会の会計を監査する。

役員は総会において選出され、任期は 2 年間とする。但し、再任は妨げない。

1. 会長及び副会長は役員会で委員の中から選出される。
2. 常任委員は会長が任命し、役員会で承認される。

役員の任命および解任は総会の出席者の過半数をもって決議される。

総会は、本協議会委員の選出、運営及び事業の承認をし、また、本協議会に関わる事案の協議を行う。

本協議会に関わる案件については総会で決議する。

総会は研究協議会とともに年 1 回開催し、会長がこれを召集する。

会長の下に事務局を置く。

本協議会の会費は、会費及び寄付金による。会費は年額 4000 円とする。

1. 教員の所属する大学、短期大学は専任、非常勤にかかわらず、会費を納入しなければならない。
2. 会費は教員の所属する大学、及び短期大学 1 校で一口とし、複数の教員が所属する場合も同様とする。(機関加盟) 但し、複数の学部それぞれ専任が配置され異なる免許を出す場合はこの限りでは無い。

本協議会は運営の為、別に細則を定める。

本協議会の事業年度は当該年度の 4 月 1 日から 3 月 31 日迄とする。

この規約は、平成 26 年 4 月 1 日から発効する。

大学造形教育連絡協議会規程

平成 26 年 3 月 15 日制定

(設置)

日本教育大学協会全国美術部門(以下教大協美術部門と略す)と全国大学造形美術教育教員養成協議会(以下全美協と略す)とで大学造形教育連絡協議会(以下協議会と略す)を置く。

(目的)

第 2 条 教大協美術部門と全美協の連絡・連携を図り、造形美術教育の一層の充実と発展を目指す。

(趣旨)

第 3 条 教大協美術部門、全美協から提案された議案について審議する。

(事業)

第 4 条 協議会はその目的を達成するため次の各号に掲げる事業を実施する。

- (1) 本協議会で計画・運営される事業の共同開催
- (2) 美術教育諸団体との連携・協力
- (3) 造形美術教育に関する研究・調査・提言
- (4) その他、本協議会の目的を実現するための諸活動

(組織)

第 5 条 協議会は教大協美術部門及び全美協から選出された委員によって構成される。

(任期)

第 6 条 委員の任期は二年とし、再任は妨げない。

(代表者)

第 7 条 委員の中から、教大協美術部門から代表者 1 名、全美協から代表者 1 名をたてる。

(役員)

第 8 条 協議会の会長・副会長は代表者を充てる。庶務担当の協議会代表者を会長とし、もう一方の代表者を副会長とする。

(庶務)

第 9 条 庶務は教大協美術部門と全美協で二年毎に担当する。

(報告)

第 10 条 審議の結果はそれぞれ教大協美術部門と全美協で報告する。

(改廃)

第 11 条 本規定の改廃は本協議会での審議によって行う。

付則 本規定は平成 26 年 4 月 1 日から施行する

全国大学造形美術教育行員養成協議会賛助会員 内規

(目的)

第1条 この規約は、本協議会規約第4条により設置する賛助会員制度の運営等について必要な事項を定め、これをもって外部関係者の本協議会に対する協力と理解を高めることにより、本協議会と協働して美術教育の振興を進めていくことを目的とする。

(加盟資格)

第2条 賛助会員の資格を有するのは、本協議会の目的と事業内容に関心を持ち賛同するとともに、本協議会の事業の円滑な実施に協力しようとする団体及び企業とする。

(賛助会員に対する事業)

第3条 本協議会は、第1条の目的を達成するため、賛助会員に対し、次の事業を行う。

- (1) 本協議会が作成又は発行する会員名簿を含む資料の提供
- (2) 本協議会又は会員との協働による美術教育の振興を進める活動
- (3) その他、第1条の目的を達成するために必要な事業

(賛助会員が実行可能な事業)

第4条 賛助会員は第1条の目的を達成するため、以下のことを行うことができる。

- (1) 本協議会又は会員と協働して美術教育の振興を進める活動。
- (2) 本協議会又は会員に対し、教材や製品などの紹介を行うことができる。
 - ① 年数回発行される会報発送時にA4用紙1枚程度にまとめた情報を会員に送ることができる。
 - ② 年1回発行の研究誌に通常の5割の費用で1頁分の広告掲載ができる。
 - ③ メーリングリスト担当者と連携を取りながら、毎月発行するメールマガジンに広告掲載やリンクを張ることができる。
 - ④ 企画者と協議のうえ、造形教育フォーラム等の全美協が主宰するイベントに参加できる。
- (3) その他、第1条の目的を達成するために必要な事業

(加盟)

第5条 賛助会員たる資格を有する団体及び企業は、あらかじめ加盟申込書を会長に提出した後、本協議会の承諾を得るものとする。

2. 前項の諾否は、役員会において決する。

(会費)

第6条 賛助会員は、年会費を納入するものとする。

2. 年会費は30,000円とする。

(脱退)

第7条 賛助会員が脱退しようとするときは、あらかじめ本協議会に届け出て脱退するものとする。

(除名)

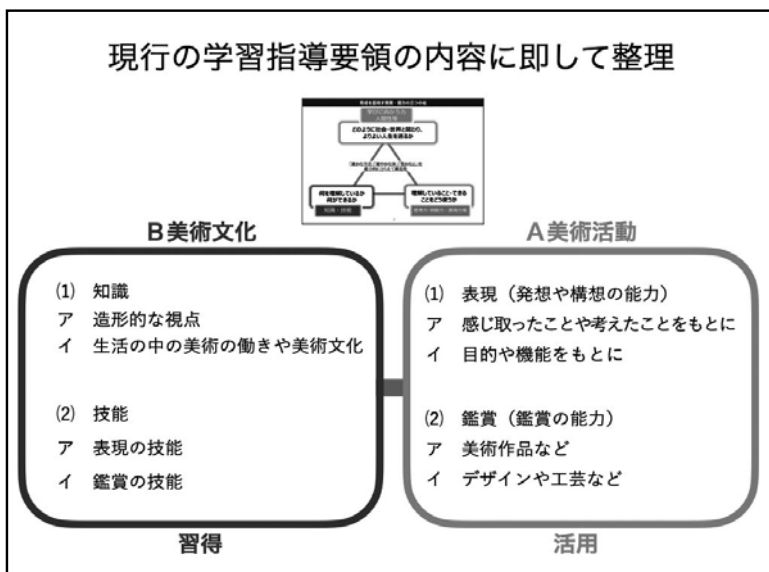
第8条 本協議会は、次の各号のいずれかに該当する賛助会員を除名することができる。

- (1) 本協議会の事業を妨げ又は妨げようとした賛助会員
- (2) 会費の納入を怠った賛助会員
- (3) 故意又は重大な過失により、本協議会の信用を失わせるような行為をした賛助会員
- (4) 犯罪その他の信用を失う行為をした賛助会員

(その他)

第9条 賛助会員について本規約に定めのない事項であって必要な事項は、役員会で決定する。

付則 この規約は、令和2年4月1日から施行する。



現行の中学校学習指導要領の内容を当てはめてみた

らスマホを与えられ多様な情報に曝され続けている現在の子どもたち。私たちが空気のように触れてきた日本の文化そのものがネットやメディアが提供する膨大な情報の中で希釈され、国籍不明なデジタル情報に曝される時間に対して日々の生活の中で身体を通して実体験する時間も減少し続ける。全国に目を向ければ人口減少とともに担い手がいなくなり失われつつある地方の伝統や文化の実態が見えてくる。

伝統や生活文化の変化は一人一人の「自分としての意味や価値」の総体として、生きている私たちが生み出していくものであるから、このような変化を決して恐れるものではない。問題なのはその変化の中で日

本人が持ち続けてきた細やかな感性が失われていくことが加速化していくのではないかと一点である。例えば伝統色一つとってもこれまで自然とともに生きてきた人々によって季節によって移ろう色彩などに美しさを込めてつけられた色名であり、また、和菓子に現れる形の美しさは日本人の感性が生み出したデザインの見しさを持っている。色彩や形だけではない。そこには目に見えない刹那を感じさせたりまた悠久の時間を想わせたり、見る人に不可視のイメージを生成させ、ものやことの意味を深く理解させていく。このような美術の言葉の獲得は美術の知識となり概念を構築する。そして異なる文化や初めて目にするものに対し、個人の中で良さと美しさを判断する基盤となっていく。

伝統文化や日本らしさについては勿論、江戸時代に生きた人々と現代の私たちの感覚や感性が異なるように、ステレオタイプの伝統文化や日本らしさを絶対視するものではない。明治末期に高村光太郎が「人が『緑色の太陽』を画いても僕はこれを非なりと言わないつもりである。僕にもそう見える事があるかも知れないからである。」と雑誌『スバル』に『緑色の太陽』として著しているがその気持ちと同じでありたい。あくまでも価値の判断は子供たちであり、美術教育においては「対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくり出す」活動であることが重要である。

故に、子どもたちには体験から生まれる意味や価値、すなわち知識をたくさん身に付けることに興味を持ってもらいたい。同時に過去の人々が価値あるものとして捉えてきた美意識を彼らの目で感じて判断してほしいと考えるのである。

自分のことを顧みると、若いころは全く伝統色に

も和菓子にも、どこか古くささを感じて興味は持てなかった。だからと言ってそのような悔恨がこの新領域論を推し進めているのではない。急速な時代の変化がこの新領域に対する思いを強めているのである。

この「A 美術文化」「B 美術活動」という分け方にはもう一つ意味がある。私たちが生きている時間軸での捉えである。それは「今」を分岐点として過去から現在にかけて蓄積されてきたもの習得されたものが「A 美術文化」であり、「B 美術活動」はそれらを活用して思考、判断、表現していく「今、そしてこれから」となる。過去と現在とは連続し不可分であるから、よってAとBの両領域は分けることなく相互に関連させて学んでいく必要がある。

領域の提案はそう簡単に答えが出るものではない。学会や研究会などで議論を重ね合意形成されていくものである。ただ、提案を行わない限り議論もされないまま過ぎていくだろう。

学習指導要領の改訂は聖域であり我々はそこに触れることも関わることもできないというものではない。今までも学習指導要領は現場の絶え間ない実践の成果が改訂の根拠となり、未来へのビジョンをもとに編纂されてきた。そのように考えると未来の美術教育を考える上で、挑戦的な現場の実践と研究者の理論とが出会う、広く、そしてダイナミックな場が必要なのだ。

多くの人たちがよりよい美術教育を求めて、発言できる場が必要だと思うのである。これまでになく美術に関わる人々が集える全日本美術教育会議が、様々な意見を戦わせ、よりよい未来に向かって、美術教育とは何かを問い続ける場になっていけば良いと願うのである。

全日本美術教育会議のことなど

武蔵野美術大学 三澤一実



2年前から次期学習指導要領の改訂に向けて、美術教育の関連団体が集まって提言書の作成に取り組んでいる。全美協からは浅野卓司先生と手塚千尋先生に参加いただいている。この集まりの名称は全日本美術教育会議といって、11の学会や団体、教育研究会などと、企業2社、そして個人で参加ができる。全日本美術教育会議といってもまだ規約もできておらず、まずは次期学習指導要領提言書作成部会が提言をまとめ、その後、組織作りへと向かう予定である。今までの集まりは全体会が1回、提言書作成部会が8回ほど開催されている。

今回、私は全日本美術教育会議の世話役として学習指導要領の提言のとりまとめを行っているのだが（正確に言うと「なつてしまった」の方が正しい）、これが大変だけども面白い。これまで議論してきた時間は24時間を超える。毎回何らかの意見が出され宿題が出る。それを次の会議で諮っていく。議論を繰り返して

いく中で、それぞれの団体が抱えている問題や主張したい内容が見えてきて、すべての団体に共通する美術教育の理念と、各団体の設立趣旨の相違が明らかになってくる。その会議の時間は団体間の相互理解と、団体の個性を際立たせていくプロセスになっていく。

なぜ、今までこのようなダイナミックな集まりがなかったのだろうか。

教育はその対象や目的に応じて、人生の尺に発達という目盛りをつけ区切っていくことが多い。大きく変化を遂げる人の成長期において効率的に教育を行うのであれば区切りは効果的だ。しかし美術教育はどうだろう。美術は本来、人生と同じように区切ることはできない不可分の営みと考える。なので教育に携わる者は常に人生と美術のふれあいをマクロで捉え、教育に関わる期間をミクロで実践していく。ともすれば教育者、研究者、および実践者としてマクロの俯瞰的視座を見失いがちになる我々は、美術を通して常に高みから人の一生を俯瞰する機会が必要になってくると思うのである。全日本美術教育会議はそのような場になつたらよいと考えている。

学習指導要領の提言書を作成していると、これは各団体の主張を調整するための会議ではないなど感じる。むしろ議論を生み出していく場である。そのことによって当たり前だと思っていたことを違う角度から見つめ直す機会となる。尖った意見を提案しその反論の中で何が大切なのかが見えてくる。本来はそのようなディスカッションは学会や研究会で口角泡を飛ばし丁々発止と行われるべきであろう。しかし、今、そのような議論はされているのであろうか。どこかで付度

が働き他人の研究分野には立ち入らないように、また協調性という同調圧力の中で流れに身を任せている状況がどこかにあるのではなかろうか。または業績を積むために所属しているだけだとか。そのような状況も勿論否定はしないが、しかしすべての人が受け身になつてしまつたらそこに創造は生まれまいだろう。そして未来の美術教育は消滅していくだろう。

前回の学習指導要領の改訂の際にも8団体で美術教育連絡協議会を立ち上げ提言を行った。そして継続を約束したその会議は提言とともに自然消滅し、異なる団体との議論の場は立ち消えてしまった。お互いに目の前の仕事に忙殺される中で優先順位が後回しにされていく。組織化はそのような状況に楔を打ち込み強制的に時間を生み出す仕組みかもしれない。「時間が足りない」「忙しい」という理由は確かにそうであるが、異なる考え方の中で自らの研究を磨いていかなくても、美術教育は確実に矮小化していく。

今回、学習指導要領の中で、領域の改編という挑戦的な提案をしてみた。義務教育では昭和52年、53年の学習指導用領以降「A表現」「B鑑賞」という領域名が使われてきた。それを「A美術文化」「B美術活動」とし、AとBと関連させながら学んでいくうとするものである。「A美術文化」は資質・能力の「知識」「技能」に該当し「B美術活動」は「思考力、判断力、表現力等」に該当する。

この領域名の改編について理由は二つあり、一つは、今日の美術は多様な活動様態を示し、デザイン思考やアート思考などの言葉が流行し、SDGsやインクルージブな社会実現において生活や社会を豊かにしていくために期待される学びになってきていると考えるからだ。もう一つは、高度情報化社会のかなで自国の文化のユニークさを再確認するためである。乳幼児か

essay

■ 研究誌『大学造形美術教育研究』投稿規定

1. 投稿資格

全国大学造形美術教育教員養成協議会加盟校に所属し、年会費が納入済みであること。

2. 投稿内容（分類）

指名論文（造形教育フォーラム報告）と投稿レポートによって構成され、大学における造形美術教育に関わる内容であり、研究ノートと実践報告、エッセーに分ける。

- A. 研究ノート：教育研究に関する内容で4頁にまとめること。
- B. 実践報告：教育実践の内容で2頁または4頁にまとめること。
- C. エッセー：造形美術教育に関わる内容で2頁または4頁にまとめること。

3. 投稿条件（件数）

会員の同一号に関する投稿件数は、単著・共著、またA・B・Cを問わず一人2本までとする。

※ 詳しくは、ホームページをご参照ください。<https://www.zenbikyo.com>

発行部数は各大学に1部、投稿者1部、他希望者を含め450部（2024年度）
複数冊希望する場合はレターパック430に送り先を記入し、下記まで送って下さい。
なお、レターパックは3cmまでなのでその範囲で送ります。残部がなくなり次第終了します。

〒271-0076 千葉県松戸市岩瀬550 聖徳大学 大成哲雄

「大学造形美術教育研究 第23号」（2024年度）

発行日 2025年3月15日

発行者 全国大学造形美術教育教員養成協議会会長
大成哲雄（聖徳大学）

編集 三澤一実（武蔵野美術大学）

事務局 中村光絵（和洋女子大）

〒272-8533 千葉県市川市国府台2-3-1
047(371) 2751

e-mail : zenbiooffice@googlegroups.com

The 2024
Journal of ART
/ DESIGN
for
Higher Education

Greeting
from
President
practice
event

Journal
report

Vol. 23